

鳥取銀行の業績

連結情報	P38
単体情報	P50
財務諸表	P51
損益の状況	P57
経営効率	P59
預金	P60
融資	P61
有価証券	P63
時価情報	P64
デリバティブ取引	P66
国際・為替業務	P67
資本・株式	P67
自己資本の充実の状況等について	P68
報酬等に関する開示事項	P83

■当行の連結財務諸表および単体財務諸表については、会社法第436条第2項第1号ならびに会社法第444条第4項および金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づき、太陽有限責任監査法人の監査・監査証明を受けております。

■直近の営業年度における営業の状況

平成29年度の連結ベースの概要につきましては、預金は、個人預金、法人預金等が増加したことから、前期末比98億84百万円増加の9,367億67百万円となりました。貸出金は、個人向け貸出が順調に増加したことに加え、事業性貸出も増加したことから、前期末比241億43百万円増加の7,625億76百万円となりました。有価証券は、国債やその他の証券が減少したことから、前期末比222億47百万円減少の1,447億7百万円となりました。経営成績につきましては、経常収益は、利回り低下に伴う貸

出金利息、有価証券利息配当金の減少により資金運用収益が減少したことなどから、前期比7億91百万円減少の154億1百万円となりました。経常費用は、与信関連費用が増加したものの、物件費の減少を主因に営業経費が減少したことなどから、前期比6億89百万円減少の135億53百万円となりました。この結果、経常利益は前期比1億2百万円減少の18億48百万円、親会社株主に帰属する当期純利益は前期比2億3百万円減少の11億5百万円となりました。

■主要な経営指標等の推移

(単位：百万円)					
	平成25年度 (自平成25年4月1日 至平成26年3月31日)	平成26年度 (自平成26年4月1日 至平成27年3月31日)	平成27年度 (自平成27年4月1日 至平成28年3月31日)	平成28年度 (自平成28年4月1日 至平成29年3月31日)	平成29年度 (自平成29年4月1日 至平成30年3月31日)
連結経常収益	18,053	17,314	16,937	16,192	15,401
連結経常利益	2,736	3,367	3,359	1,950	1,848
親会社株主に帰属する当期純利益	1,584	2,137	1,997	1,308	1,105
連結包括利益	1,150	7,464	1,155	△835	642
連結純資産額	44,005	50,687	51,279	49,879	49,959
連結総資産額	962,723	974,969	994,225	1,009,490	1,012,550
1株当たり純資産額	465円78銭	540円20銭	5,466円29銭	5,317円22銭	5,325円76銭
1株当たり当期純利益	16円79銭	22円69銭	213円27銭	139円66銭	118円00銭
連結自己資本比率（国内基準）	10.95%	10.62%	10.74%	9.58%	9.40%

(注) 1. 当行及び連結子会社の消費税及び地方消費税の会計処理は、税抜方式によっております。
2. 平成28年10月1日付で普通株式10株を1株とする株式併合を実施いたしました。1株当たり純資産額及び1株当たり当期純利益は、平成27年度の期首に当該株式併合が行われたと仮定して算出しております。
3. 連結自己資本比率は、銀行法第14条の2の規定に基づく平成18年金融庁告示第19号に定められた算式に基づき算出しております。当行は、国内基準を採用しております。

■連結貸借対照表

(単位：百万円)		
＜資産の部＞	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
現金預け金	64,547	73,788
有価証券	166,954	144,707
貸出金	738,433	762,576
外国為替	426	501
劣後受益権	9,458	－
その他資産	5,503	5,972
有形固定資産	11,776	11,381
建物	3,400	3,304
土地	7,017	6,888
リース資産	1,091	951
建設仮勘定	－	7
その他の有形固定資産	266	230
無形固定資産	619	716
ソフトウェア	354	503
リース資産	216	165
その他の無形固定資産	48	47
退職給付に係る資産	6,264	6,708
繰延税金資産	1,166	1,225
支払承諾見返	7,287	8,668
貸倒引当金	△2,935	△3,681
投資損失引当金	△14	△15
資産の部合計	1,009,490	1,012,550

(単位：百万円)		
＜負債の部＞	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
預金	926,883	936,767
コールマネー及び売渡手形	58	56
借入金	14,000	8,700
その他負債	8,200	5,229
賞与引当金	473	482
退職給付に係る負債	1,716	1,724
偶発損失引当金	293	265
睡眠預金払戻損失引当金	45	39
販売促進引当金	20	24
再評価に係る繰延税金負債	631	631
支払承諾	7,287	8,668
負債の部合計	959,610	962,591

(単位：百万円)		
＜純資産の部＞	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
資本金	9,061	9,061
資本剰余金	6,452	6,452
利益剰余金	29,231	29,770
自己株式	△672	△673
株主資本合計	44,073	44,611
その他有価証券評価差額金	2,586	2,232
繰延ヘッジ損益	△0	0
土地再評価差額金	1,058	1,062
退職給付に係る調整累計額	2,078	1,966
その他の包括利益累計額合計	5,724	5,262
非支配株主持分	82	85
純資産の部合計	49,879	49,959
負債及び純資産の部合計	1,009,490	1,012,550

■連結損益計算書

(単位：百万円)		
区分	前連結会計年度 (自平成28年4月1日 至平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自平成29年4月1日 至平成30年3月31日)
経常収益	16,192	15,401
資金運用収益	12,113	10,807
貸出金利息	9,655	9,153
有価証券利息配当金	2,260	1,409
コールローン利息及び買入手形利息	0	0
預け金利息	41	43
その他の受入利息	156	200
役務取引等収益	2,782	2,594
その他業務収益	897	1,519
その他経常収益	398	481
貸倒引当金戻入益	8	－
償却債権取立益	114	101
その他の経常収益	275	379
経常費用	14,242	13,553
資金調達費用	998	637
預金利息	647	535
コールマネー利息及び売渡手形利息	0	0
借入金利息	52	50
社債利息	143	－
その他の支払利息	154	51
役務取引等費用	1,467	1,470
その他業務費用	189	483
営業経費	11,056	9,971
その他経常費用	529	990
貸倒引当金繰入額	－	830
その他の経常費用	529	160
経常利益	1,950	1,848
特別損失	9	149
固定資産処分損	5	6
その他の特別損失	3	143
税金等調整前当期純利益	1,941	1,698
法人税、住民税及び事業税	912	412
法人税等調整額	△283	177
法人税等合計	629	589
当期純利益	1,311	1,108
非支配株主に帰属する当期純利益	3	3
親会社株主に帰属する当期純利益	1,308	1,105

■連結包括利益計算書

(単位：百万円)		
区分	前連結会計年度 (自平成28年4月1日 至平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自平成29年4月1日 至平成30年3月31日)
当期純利益	1,311	1,108
その他の包括利益	△2,146	△466
その他有価証券評価差額金	△2,385	△425
繰延ヘッジ損益	△0	0
退職給付に係る調整額	233	△112
持分法適用会社に対する持分相当額	5	72
包括利益	△835	642
(内訳)		
親会社株主に係る包括利益	△838	639
非支配株主に係る包括利益	3	3

■連結株主資本等変動計算書

前連結会計年度（自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日）(単位：百万円)

	株主資本				
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	自己株式	株主資本合計
当期首残高	9,061	6,452	28,485	△670	43,329
当期変動額					
剰余金の配当			△561		△561
親会社株主に帰属する当期純利益			1,308		1,308
自己株式の取得				△2	△2
自己株式の処分			△0	0	0
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）					
当期変動額合計	－	－	746	△2	743
当期末残高	9,061	6,452	29,231	△672	44,073

	その他の包括利益累計額					非支配株主持分	純資産合計
	その他 有価証券 評価差額金	繰延ヘッジ損益	土地再評価 差額金	退職給付 に係る 調整累計額	その他の 包括利益 累計額合計		
当期首残高	4,966	△0	1,058	1,845	7,871	78	51,279
当期変動額							
剰余金の配当							△561
親会社株主に帰属する当期純利益							1,308
自己株式の取得							△2
自己株式の処分							0
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	△2,380	△0	－	233	△2,146	3	△2,143
当期変動額合計	△2,380	△0	－	233	△2,146	3	△1,399
当期末残高	2,586	△0	1,058	2,078	5,724	82	49,879

当連結会計年度（自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日）(単位：百万円)

	株主資本				
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	自己株式	株主資本合計
当期首残高	9,061	6,452	29,231	△672	44,073
当期変動額					
剰余金の配当			△561		△561
親会社株主に帰属する当期純利益			1,105		1,105
自己株式の取得				△1	△1
土地再評価差額金の取崩			△3		△3
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）					
当期変動額合計	－	－	539	△1	537
当期末残高	9,061	6,452	29,770	△673	44,611

	その他の包括利益累計額					非支配株主持分	純資産合計
	その他 有価証券 評価差額金	繰延ヘッジ損益	土地再評価 差額金	退職給付 に係る 調整累計額	その他の 包括利益 累計額合計		
当期首残高	2,586	△0	1,058	2,078	5,724	82	49,879
当期変動額							
剰余金の配当							△561
親会社株主に帰属する当期純利益							1,105
自己株式の取得							△1
土地再評価差額金の取崩							△3
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	△353	0	3	△112	△462	3	△458
当期変動額合計	△353	0	3	△112	△462	3	79
当期末残高	2,232	0	1,062	1,966	5,262	85	49,959

■連結キャッシュ・フロー計算書

(単位：百万円)

	前連結会計年度 （ 自平成28年4月1日 至平成29年3月31日 ）	当連結会計年度 （ 自平成29年4月1日 至平成30年3月31日 ）
営業活動によるキャッシュ・フロー		
税金等調整前当期純利益	1,941	1,698
減価償却費	1,347	876
貸倒引当金の増減（△）	△77	746
持分法による投資損益（△は益）	△8	△5
投資損失引当金の増減額（△は減少）	△0	1
賞与引当金の増減額（△は減少）	△12	9
退職給付に係る資産の増減額（△は増加）	△433	△629
退職給付に係る負債の増減額（△は減少）	81	32
睡眠預金払戻損失引当金の増減（△）	△7	△5
偶発損失引当金の増減（△）	48	△28
資金運用収益	△12,113	△10,807
資金調達費用	998	637
有価証券関係損益（△）	△378	△655
為替差損益（△は益）	0	0
固定資産処分損益（△は益）	5	6
貸出金の純増（△）減	△16,888	△24,142
預金の純増減（△）	18,441	9,884
コールマネー等の純増減（△）	△927	△5,301
外国為替（資産）の純増（△）減	51	△75
外国為替（負債）の純増減（△）	△5	－
資金運用による収入	12,203	10,703
資金調達による支出	△1,084	△753
その他	△2,115	6,629
小計	1,066	△11,178
法人税等の支払額	△648	△656
営業活動によるキャッシュ・フロー	418	△11,834
投資活動によるキャッシュ・フロー		
有価証券の取得による支出	△60,965	△15,137
有価証券の売却による収入	15,097	14,996
有価証券の償還による収入	29,035	22,509
有形固定資産の取得による支出	△1,232	△382
有形固定資産の売却による収入	0	－
その他の資産の取得による支出	△127	△346
投資活動によるキャッシュ・フロー	△18,191	21,639
財務活動によるキャッシュ・フロー		
劣後特約付社債の償還による支出	△5,000	－
自己株式の取得による支出	△2	△1
自己株式の売却による収入	0	－
配当金の支払額	△561	△561
財務活動によるキャッシュ・フロー	△5,563	△563
現金及び現金同等物に係る換算差額	△0	△0
現金及び現金同等物の増減額（△は減少）	△23,336	9,241
現金及び現金同等物の期首残高	87,884	64,547
現金及び現金同等物の期末残高	64,547	73,788



連結情報

注記事項

(当連結会計年度(平成29年4月1日から平成30年3月31日まで))

(連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項)

1.連結の範囲に関する事項

- (1) 連結子会社 1社
会社名
株式会社とりぎんカードサービス
- (2) 非連結子会社
会社名
とっとり地方創生ファンド投資事業有限責任組合
- 非連結子会社は、その資産、経常収益、当期純損益(持分に見合う額)及び利益剰余金(持分に見合う額)等からみて、連結の範囲から除いても企業集団の財政状態及び経営成績に関する合理的な判断を妨げない程度に重要性が乏しいため、連結の範囲から除外しております。

2.持分法の適用に関する事項

- (1) 持分法適用の非連結子会社
該当ありません。
- (2) 持分法適用の関連会社 2社
会社名
とりぎんリース株式会社
とっとりキャピタル株式会社
- (3) 持分法非適用の非連結子会社
会社名
とっとり地方創生ファンド投資事業有限責任組合
- 持分法非適用の非連結子会社は、当期純損益(持分に見合う額)及び利益剰余金(持分に見合う額)等からみて、持分法の対象から除いても連結財務諸表に重要な影響を与えないため、持分法の対象から除いております。

(4) 持分法非適用の関連会社

該当ありません。

3.連結子会社の事業年度等に関する事項

連結子会社の決算日は、連結決算日と一致しております。

4.会計方針に関する事項

- (1) 商品有価証券の評価基準及び評価方法
商品有価証券の評価は、時価法(売却原価は主として移動平均法により算定)により行っております。
- (2) 有価証券の評価基準及び評価方法
- ① 有価証券の評価は、満期保有目的の債券については移動平均法による償却原価法(定額法)、その他有価証券については原則として連結決算日の市場価格等に基づく時価法(売却原価は主として移動平均法により算定)、ただし時価を把握することが極めて困難と認められるものについては移動平均法による原価法により行っております。
- なお、その他有価証券の評価差額については、全部純資産直入法により処理しております。
- ② 有価証券運用を主目的とする単独運用の金銭の信託において信託財産として運用されている有価証券の評価は、時価法により行っております。
- (3) デリバティブ取引の評価基準及び評価方法
デリバティブ取引の評価は、時価法により行っております。
- (4) 固定資産の減価償却の方法
- ① 有形固定資産(リース資産を除く)
当行の有形固定資産は、定率法(ただし、平成10年4月1日以後に取得した建物(建物附属設備を除く。))並びに平成28年4月1日以後に取得した建物附属設備及び構築物については定額法)を採用しております。
- また、主な耐用年数は次のとおりであります。
- | | |
|-----|--------|
| 建物 | 6年～50年 |
| その他 | 2年～20年 |
- ② 無形固定資産(リース資産を除く)
無形固定資産は、定額法により償却しております。なお、自社利用のソフトウェアについては、当行及び連結子会社で定める利用可能期間(主として5年)に基づいて償却しております。
- ③ リース資産
所有権移転外ファイナンス・リース取引に係る「有形固定資産」及び「無形固定資産」中のリース資産は、リース期間を耐用年数とした定額法により償却しております。なお、残存価額については、リース契約上に残価保証の取決めがあるものは当該残価保証額とし、それ以外のものは零としております。
- (5) 繰延資産の処理方法
株式交付費及び社債発行費は、支出時に全額費用として処理しております。
- (6) 貸倒引当金の計上基準
当行の貸倒引当金は、予め定めている償却・引当基準に則り、次のとおり計上しております。
- 破産、特別清算等法的に経営破綻の事実が発生している債務者(以下「破綻先」という。)に係る債権及びそれと同等の状況にある債務者(以下「実質破綻先」という。)に係る債権については、以下のなお書きに

記載されている直接減額後の帳簿価額から、担保の処分可能見込額及び保証による回収可能見込額を控除し、その残額を計上しております。

また、現在は経営破綻の状況にないが、今後経営破綻に陥る可能性が大きいと認められる債務者(以下「破綻懸念先」という。)に係る債権については、債権額から、担保の処分可能見込額及び保証による回収可能見込額を控除し、その残額のうち、債務者の支払能力を総合的に判断し必要と認める額を計上しております。

上記以外の債権については、過去の一定期間における貸倒実績から算出した貸倒実績率等に基づき計上しております。

すべての債権は、資産の自己査定基準に基づき、営業関連部署が資産査定を実施し、当該部署から独立した資産監査部署が査定結果を監査しております。

なお、破綻先及び実質破綻先に対する担保・保証付債権等については、債権額から担保の評価額及び保証による回収が可能と認められる額を控除した残額を取立不能見込額として債権額から直接減額しており、その金額は1,009百万元であります。

連結子会社の貸倒引当金は、一般債権については過去の貸倒実績率等を勘案して必要と認めた額を、貸倒懸念債権等特定の債権については、個別に回収可能性を勘案し、回収不能見込額をそれぞれ計上しております。

(7) 投資損失引当金の計上基準
投資損失引当金は、投資に対する損失に備えるため、有価証券の発行会社の財政状態等を勘案して必要と認められる額を計上しております。

(8) 賞与引当金の計上基準
賞与引当金は、従業員への賞与の支払に備えるため、従業員に対する賞与の支給見込額のうち、当連結会計年度に帰属する額を計上しております。

(9) 睡眠預金払戻損失引当金の計上基準
睡眠預金払戻損失引当金は、利益計上した睡眠預金について、預金者からの払戻損失に備えるため、過去実績に基づく将来の払戻損失見込額を計上しております。

(10) 偶発損失引当金の計上基準
偶発損失引当金は、信用保証協会の責任共有制度の導入により、将来発生する負担金の支払に備えるため、必要額を計上しております。

(11) 販売促進引当金の計上基準
子会社のクレジットカード事業において、ポイント利用による費用負担に備えるため、利用実績率に基づき、今後利用されると見込まれるポイントに対して、販売促進引当金を計上しております。

(12) 利息返還損失引当金の計上基準
子会社のクレジットカード事業において、将来の利息返還の請求に備えるため、過去の返還実績等を勘案した利息返還損失引当金を計上しております。

なお、当該引当金の計上による影響は軽微であり、金額的重要性に乏しいため、「その他負債」に含めて表示しております。

(13) 退職給付に係る会計処理の方法
退職給付債務の算定に当たり、退職給付見込額を当連結会計年度末までの期間に帰属させる方法については給付算定式基準によっております。

また、過去勤務費用及び数理計算上の差異の損益処理方法は次のとおりであります。

過去勤務費用	：その発生時の従業員の平均残存勤務期間内の一定の年数(主として5年)による定額法により損益処理
数理計算上の差異	：各連結会計年度の発生時の従業員の平均残存勤務期間内の一定の年数(主として10年)による定額法により按分した額を、それぞれ発生の日翌連結会計年度から損益処理

なお、連結子会社は、退職給付に係る負債及び退職給付費用の計算に、退職給付に係る期末自己都合要支給額を退職給付債務とする方法を用いた簡便法を一部適用しております。

(14) 外貨建の資産及び負債の本邦通貨への換算基準
当行の外貨建資産・負債については、連結決算日の為替相場による円換算額を付しております。

連結子会社の外貨建資産・負債は該当ありません。

(15) 重要なヘッジ会計の方法

① 金利リスク・ヘッジ
当行の金融資産・負債から生じる金利リスクに対するヘッジ会計の方法は、「銀行業における金融商品会計基準適用に関する会計上及び監査上の取扱い」(日本公認会計士協会業種別監査委員会報告第24号 平成14年2月13日)に規定する繰延ヘッジによっております。

ヘッジ有効性評価の方法については、相場変動を相殺するヘッジについて、ヘッジ対象となる預金・貸出金等とヘッジ手段である金利スワップ取引等を一定の(残存)期間毎にグルーピングのうえ特定し評価しております。

また、キャッシュ・フローを固定するヘッジについては、ヘッジ対象とヘッジ手段の金利変動要素の相関関係の検証により有効性の評価をしております。

② 為替変動リスク・ヘッジ
当行の外貨建金融資産・負債から生じる為替変動リスクに対するヘッ

ジ会計の方法は、「銀行業における外貨建取引等の会計処理に関する会計上及び監査上の取扱い」(日本公認会計士協会業種別監査委員会報告第25号 平成14年7月29日)に規定する繰延ヘッジによっております。

ヘッジ有効性評価の方法については、外貨建金銭債権債務等の為替変動リスクを減殺する目的で行う通貨スワップ取引及び為替スワップ取引等をヘッジ手段とし、ヘッジ対象である外貨建金銭債権債務等に見合うヘッジ手段の外貨ポジション相当額が存在することを確認することによりヘッジの有効性を評価しております。

連結子会社はヘッジ取引を行っておりません。

(16) 連結キャッシュ・フロー計算書における資金の範囲
連結キャッシュ・フロー計算書における資金の範囲は、連結貸借対照表上の「現金預け金」であります。

(17) 消費税等の会計処理
当行及び連結子会社の消費税及び地方消費税の会計処理は、税抜方式によっております。

ただし、有形固定資産に係る控除対象外消費税等は当連結会計年度の費用に計上しております。

(連結貸借対照表関係)

- 1.非連結子会社及び関連会社の株式又は出資金の総額
- | | |
|-----|--------|
| 株 式 | 316百万元 |
| 出資金 | 241百万元 |
- 2.貸出金のうち破綻先債権額及び延滞債権額は次のとおりであります。
- | | |
|--------|----------|
| 破綻先債権額 | 216百万元 |
| 延滞債権額 | 9,329百万元 |
- なお、破綻先債権とは、元本又は利息の支払の遅延が相当期間継続していることその他の事由により元本又は利息の取立て又は弁済の見込みがないものとして未収利息を計上しなかった貸出金(貸倒償却を行った部分を除く。以下「未収利息不計上貸出金」という。)のうち、法人税法施行令(昭和40年政令第97号)第96条第1項第3号イからホまでに掲げる事由又は同項第4号に規定する事由が生じている貸出金であります。
- また、延滞債権とは、未収利息不計上貸出金であって、破綻先債権及び債務者の経営再建又は支援を図ることを目的として利息の支払を猶予した貸出金以外の貸出金であります。
- 3.貸出金のうち3カ月以上延滞債権額は次のとおりであります。
- | | |
|------------|-------|
| 3カ月以上延滞債権額 | 78百万元 |
|------------|-------|
- なお、3カ月以上延滞債権とは、元本又は利息の支払が、約定支払日の翌日から3月以上遅延している貸出金で破綻先債権及び延滞債権に該当しないものであります。
- 4.貸出金のうち貸出条件緩和債権額は次のとおりであります。
- | | |
|-----------|----------|
| 貸出条件緩和債権額 | 1,006百万元 |
|-----------|----------|
- なお、貸出条件緩和債権とは、債務者の経営再建又は支援を図ることを目的として、金利の減免、利息の支払猶予、元本の返済猶予、債権放棄その他の債務者に有利となる取決めを行った貸出金で破綻先債権、延滞債権及び3カ月以上延滞債権に該当しないものであります。
- 5.破綻先債権額、延滞債権額、3カ月以上延滞債権額及び貸出条件緩和債権額の合計額は次のとおりであります。
- | | |
|-----|-----------|
| 合計額 | 10,631百万元 |
|-----|-----------|
- なお、上記2.から5.に掲げた債権額は、貸倒引当金控除前の金額であります。
- 6.手形割引は、「銀行業における金融商品会計基準適用に関する会計上及び監査上の取扱い」(日本公認会計士協会業種別監査委員会報告第24号 平成14年2月13日)に基づき金融取引として処理しております。
- これにより受け入れた銀行引受手形、商業手形、荷付が替手形及び買入外国為替等は、売却又は(再)担保という方法で自由に処分できる権利を有しておりますが、その額面金額は次のとおりであります。
- | | |
|--|----------|
| | 1,775百万元 |
|--|----------|

7.担保に供している資産は次のとおりであります。

担保に供している資産	
有価証券	19,559百万元
計	19,559百万元
担保資産に対応する債務	
預金	911百万元
借入金	5,700百万元
上記のほか、為替決済の取引の担保あるいは先物取引証拠金等の代用として、次のものを差し入れております。	
有価証券	11,092百万元
また、その他資産には、金融商品等差入担保金及び保証金が含まれておりますが、その金額は次のとおりであります。	
金融商品等差入担保金	2,300百万元
保証金	326百万元

- 8.当座貸越契約及び貸付金に係るコミットメントライン契約は、顧客からの融資実行の申し出を受けた場合に、契約上規定された条件について違反がない限り、一定の限度額まで資金を貸付けることを約する契約であります。
- これらの契約に係る融資未実行残高は次のとおりであります。
- | | |
|------------------|------------|
| 融資未実行残高 | 237,294百万元 |
| うち契約残存期間が1年以内のもの | 237,294百万元 |
- なお、これらの契約の多くは、融資実行されずに終了するものであるため、融資未実行残高そのものが必ずしも当行及び連結子会社の将来のキャッシュ・フローに影響を与えるものではありません。
- これらの契約の多くには、金融情勢の変化、債権の保全及びその他相当の事由があるときは、当行及び連結子会社が実行申し込みを受けた融資の拒絶又は契約極度額の減額をすることができる旨の条項が付けられています。
- また、契約時において必要に応じて不動産・有価証券等の担保を徴求するほか、契約後も定期的に(半年毎に)予め定めている行内(社内)手続に基づき顧客の業況等を把握し、必要に応じて契約の見直し、与信保全上の措置等を請じております。
- 9.土地の再評価に関する法律(平成10年3月31日公布法律第34号)に基づき、当行の事業用の土地の再評価を行い、評価差額については、当該評価差額に係る税金相当額を「再評価に係る繰延税金負債」として負債の部に計上し、これを控除した金額を「土地再評価差額金」として純資産の部に計上しております。
- 再評価を行った年月日 平成10年3月31日
- 同法律第3条第3項に定める再評価の方法
- 土地の再評価に関する法律施行令(平成10年3月31日公布政令第119号)第2条第1号に定める地価公示法に基づいて、奥行価格補正、時点修正等合理的な調整を行って算出。
- 同法律第10条に定める再評価を行った事業用の土地の期末における時価の合計額と当該事業用の土地の再評価後の帳簿価額の合計額との差額
- | |
|----------|
| 4,387百万元 |
|----------|
- 10.有形固定資産の減価償却累計額
- | | |
|---------|----------|
| 減価償却累計額 | 9,646百万元 |
|---------|----------|
- 11.有形固定資産の圧縮記帳額
- | | |
|-------|----------|
| 圧縮記帳額 | 2,838百万元 |
|-------|----------|
- 12.借入金には、他の債務よりも債務の履行が後順位である旨の特約が付された劣後特約付借入金が含まれております。
- | | |
|----------|----------|
| 劣後特約付借入金 | 3,000百万元 |
|----------|----------|
- 13.「有価証券」中の社債のうち、有価証券の私募(金融商品取引法第2条第3項)による社債に対する保証債務の額
- | |
|-----------|
| 11,330百万元 |
|-----------|

(連結損益計算書関係)

- 1.営業経費には、次のものを含んでおります。
- | | |
|-------------|----------|
| 雑費 | 2,625百万元 |
| 給料・手当 | 4,306百万元 |
| 土地建物及び機械賃借料 | 632百万元 |
| 退職給付費用 | △176百万元 |
| 預金保険料 | 330百万元 |
| 社会保険料 | 676百万元 |
- 2.その他の経常費用には、次のものを含んでおります。
- | | |
|--------|-------|
| 貸出金償却 | 50百万元 |
| 株式等償却 | 8百万元 |
| 株式等売却損 | 49百万元 |
- 3.その他の特別損失には、次のものを含んでおります。
- | | |
|------|--------|
| 減損損失 | 143百万元 |
|------|--------|
- 当連結会計年度において、継続的な地価の下落等に伴い、県内外の営業店舗及び遊休資産について143百万元の減損損失を計上しております。
- 減損損失の固定資産の種類ごとの内訳は、土地132百万円、建物6百万円、その他の有形固定資産4百万円であります。
- 当行は、営業政策上の地区を資産のグルーピング単位としております。
- また、本店及び事務センター等は、独立したキャッシュ・フローを生み出さないことから共用資産としております。
- 当連結会計年度の減損損失の回収可能価額の測定は、正味売却価額によっております。
- 正味売却価額は、原則として不動産鑑定評価基準に基づき算定しております。



連結情報

(連結包括利益計算書関係)

1.その他の包括利益に係る組替調整額及び税効果額

その他有価証券評価差額金	
当期発生額	833百万円
組替調整額	△1,445百万円
税効果調整前	△612百万円
税効果額	186百万円
その他有価証券評価差額金	△425百万円

繰延ヘッジ損益	
当期発生額	0百万円
組替調整額	0百万円
税効果調整前	0百万円
税効果額	△0百万円
繰延ヘッジ損益	0百万円

退職給付に係る調整額	
当期発生額	63百万円
組替調整額	△225百万円
税効果調整前	△161百万円
税効果額	49百万円
退職給付に係る調整額	△112百万円

持分法適用会社に対する持分相当額	
当期発生額	72百万円
組替調整額	一百万円
税効果調整前	72百万円
税効果額	一百万円
持分法適用会社に対する持分相当額	72百万円
その他の包括利益合計	△466百万円

(連結株主資本等変動計算書関係)

1.発行済株式の種類及び総数並びに自己株式の種類及び株式数に関する事項

	当連結会計年度期首株式数	当連結会計年度増加株式数	当連結会計年度減少株式数	当連結会計年度末株式数
発行済株式				
普通株式	9,619	－	－	9,619
合計	9,619	－	－	9,619
自己株式				
普通株式	254	0	－	255
合計	254	0	－	255

(注) 自己株式の普通株式の増加0千株は、単元未満株式の買取によるものであります。

2.新株予約権及び自己新株予約権に関する事項

該当事項はありません。

3.配当に関する事項

(1) 当連結会計年度中の配当金支払額

	(決議)	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	1株当たり 配当額 (円)	基準日	効力発生日
平成29年6月27日	定時株主総会	普通株式	280	30.0	平成29年3月31日	平成29年6月28日
平成29年11月10日	取締役会	普通株式	280	30.0	平成29年9月30日	平成29年12月4日

(注) 平成28年10月1日付で普通株式10株を1株とする株式併合を実施いたしました。

(2) 基準日が当連結会計年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が当連結会計年度の末日後となるもの

	(決議)	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	配当の 原資	1株当たり 配当額 (円)	基準日	効力発生日
平成30年6月26日	定時株主総会	普通株式	280	利益剰余金	30.0	平成30年3月31日	平成30年6月27日

(連結キャッシュ・フロー計算書関係)

1.現金及び現金同等物の期末残高と連結貸借対照表に掲記されている科目の金額との関係

現金預け金勘定	73,788百万円
現金及び現金同等物	73,788百万円

(リース取引関係)

1.ファイナンス・リース取引

所有権移転外ファイナンス・リース取引

(1) リース資産の内容

① 有形固定資産
主として、電子機器及び車両であります。

② 無形固定資産
ソフトウェアであります。

(2) リース資産の減価償却の方法

連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項「4 会計方針に関する事項」の「(4) 固定資産の減価償却の方法」に記載のとおりであります。

2.オペレーティング・リース取引

オペレーティング・リース取引のうち解約不能のものに係る未経過リース料

	(単位：百万円)
1年内	2
1年超	2
合 計	4

(金融商品関係)

1.金融商品の状況に関する事項

(1) 金融商品に対する取組方針

当行グループは、銀行業、クレジットカード業務などの金融サービス事業を行っております。これらの事業を行うための資金調達の大半は顧客からの預金であり、調達した資金の大半を地元を中心とした貸出金及び国債を中心とした有価証券により運用しております。

なお、金利変動を伴う金融資産及び金融負債を有していることから、金利変動による不利な影響が生じないよう、当行では、資産及び負債の統合的管理（A L M）を行っており、その一環として、デリバティブ取引も行っております。

(2) 金融商品の内容及びそのリスク

当行グループが保有する金融資産は、主として国内の取引先及び個人に対する貸出金であり、顧客の信用リスクに晒されております。なお、当行では特定の業種に偏ることなく、信用リスクの分散に努めております。また、有価証券は、主に株式、債券、投資信託であり、満期保有目的、純投資目的及び政策投資目的で保有しております。これらは、それぞれ発行体の信用リスク及び金利の変動リスク、市場価格の変動リスク、為替リスクに晒されております。

社債は、一定の環境の下で当行グループが市場を利用できなくなる場合など、支払期日にその支払を実行できなくなる流動性リスクに晒されております。

デリバティブ取引は、金利関連では金利スワップ取引、通貨関連では通貨スワップ取引及び為替予約取引（資金関連のスワップ取引を含む。以下同じ）、有価証券関連では債券店頭オプション取引を取扱っております。金利スワップ取引は、資産・負債の金利変動リスク等を回避し、安定的な収益を確保するための有効なリスクヘッジ手段として取組みを行っており、ヘッジ対象である預金・貸出金等に関わる金利の変動リスクに対してヘッジ会計を適用しております。なお、金利リスクに対するヘッジ有効性評価の方法については、相場変動を相殺するヘッジについて、ヘッジ対象となる預金・貸出金等とヘッジ手段である金利スワップ取引等を一定の（残存）期間毎にグルーピングのうえ特定し評価しております。また、キャッシュ・フローを固定するヘッジについては、ヘッジ対象とヘッジ手段の金利変動要素の相関関係の検証により有効性の評価をしています。通貨スワップ取引及び為替予約取引は、外貨建債権債務に係る将来の為替レートの変動リスクを回避する目的で取組みを行っております。為替変動リスクに対するヘッジ有効性評価の方法については、外貨建金銭債権債務等の為替変動リスクを減殺する目的で行う通貨スワップ取引及び為替スワップ取引等をヘッジ手段とし、ヘッジ対象である外貨建金銭債権債務等に見合うヘッジ手段の外貨ポジション相当額が存在することを確認することによりヘッジの有効性を評価しております。なお、連結子会社はヘッジ取引を行っておりません。

(3) 金融商品に係るリスク管理体制

① 信用リスクの管理

当行グループは、信用リスク管理にあたっては、信用リスク管理の重要性を十分認識した上で、信用リスクについて適切な管理体制を構築し、「信用格付」「自己査定」などを通じ、信用リスクを客観的かつ定量的に把握するほか、信用リスク定量化等により各種リスク分析を行った上で、特定先のへの与信集中、業種の偏り等、過大な与信リスクを回避するとともに、収益とリスクのバランスがとれた与信業務の遂行を図ることを基本方針としております。

そのため、「信用リスク管理規定」や「クレジットポリシー」を整備しているほか、適切な信用リスク管理体制・組織を構築するため、リスク管理統括部署を経営管理部、信用リスク管理部署を審査部、運営部署を営業部・市場金融部とし、さらに、与信監査部署として監査部資産監査室を設置し、それぞれが独立性を維持し、営業推進部門の影響を受けない体制としております。

また、信用リスク量をVaRで定量化し、統合リスク管理において信用リスク部分に配賦されたリスク資本配賦額の範囲内でカバーされるようにポートフォリオ管理を行い、資産の適正配分による信用リスク資本の極小化、収益の極大化を図るとともに、リスク量については定期的にA L M委員会等に報告しております。

なお、市場信用リスクについては、発行体等の信用リスクに関して、外部格付等の把握を定期的に行い、リスク量を計測しております。

② 市場リスクの管理

(i) 市場リスクの管理

当行グループは、市場リスク管理の重要性を十分認識し、市場リスクについての磐石な管理体制を構築し、リスクを総合的に把握し適切にコントロールしながら安定的な収益を確保できる運営に取組むとともに、金利予測等の情報収集・分析を行い、状況に応じた機動的な対応を図ることを市場リスク管理の基本方針とし、「市場リスク管理規定」「市場リスク管理要領」等を整備しております。

市場リスク管理体制としては、リスク管理統括部署を経営管理部、リスク管理部署を経営統括部、運営部署を市場金融部及び本部各部・営業店とし、相互牽制が効果的に行われる組織体制を構築しております。また、市場リスクが当行の経営体力を超える過大なものとならないよう、統合リスク管理に基づく資本配賦額を市場リスクに対する限度枠とし、配賦資本内での運用を行っております。

なお、市場リスクは、「預貸ギャップ金利リスク」「市場リスク（有価証券等）」「政策投資株式リスク」についてリスク量を計量化しており、「預貸ギャップ金利リスク」については月次ペースで、「市場リスク（有価証券等）」「政策投資株式リスク」については日次ペースで計測し、A L M委員会等へ報告する体制としております。

(ii) デリバティブ取引

デリバティブ取引については、その取組限度額を経営会議で決定し、運用状況についても毎月報告を行っております。これを受け、各部署は取引限度額、取引手続き等を定めた行内規定に基づき取引を行っております。

また、市場金融部の金利スワップ取引・為替予約取引・債券店頭オプション取引の各部署で日々ポジション管理を行い、毎月信用リスク相当額を算出し経営会議に報告しております。

(iii) 市場リスクに係る定量的情報

当行グループにおける市場リスクの定量化手法及び市場リスク量は、以下のとおりであります。

有価証券を除く資産・負債（貸出金・預金等）に係る「預貸ギャップ金利リスク」の計測については、99パーセンタイル値（保有期間120日、信頼区間99％、観測期間5年）で計測される金利変動幅に基づきリスク量を算出しています。

また、有価証券（商品勘定、政策投資株式除く）や買入金銭債権、仕組貸出に係る「市場リスク」については、主として分散共分散法（保有期間60日～120日、信頼区間99％、観測期間1年）またはヒストリカル・シミュレーション法（保有期間120日、信頼区間99％、観測期間2年）によりVaRを算出しております。

政策投資株式（関係会社株式を含む）については、分散共分散法（保有期間120日、信頼区間99％、観測期間1年）によりVaRを算出しております。

平成30年3月31日（当期の連結決算日）現在での「預貸ギャップ金利リスク」「市場リスク」「政策投資株式リスク」の合計は7,149百万円であります。

なお、当行グループでは、モデルが算出するVaRと実際の損益を比較するバックテストングを定期的に実施し、算出したVaRの値が十分な精度により市場リスクを補足していることを検証しております。ただし、VaRは過去の相場変動をベースに統計的に算出した一定の発生確率での市場リスク量を計測しており、通常では考えられないい市場環境が激変する状況下におけるリスクは補足できない場合があります。

③ 資金調達に係る流動性リスクの管理

当行グループは、資金繰り運営の重要性を十分認識し、資金繰りの逼迫に応じた管理体制を構築し、資金調達・運用構造に則した十分な支払準備の確保に努める等、適切かつ安定的な資金繰り運営に取組むとともに、状況に応じた機動的な対応を図るほか、市場流動性の重要性を十分認識し、市場流動性の高い商品を主体とした運用を行うこととする等、適切に運営・管理することを流動性リスク管理の基本方針としております。

そのため、「流動性リスク管理規定」「資金繰りリスク管理要領」等を整備しているほか、リスク管理統括部署を経営管理部、リスク管理部署を経営統括部、資金繰り管理部署を市場金融部とし、資金繰り管理部署は、日次ペースで資金確保可能額をリスク管理部署へ報告するほか、資金繰りについて月次ペースで経営会議へ報告する等の体制としております。

(4) 金融商品の時価等に関する事項についての補足説明

金融商品の時価には、市場価格に基づく価額のほか、市場価格がない場合には合理的に算定された価額が含まれております。当該価額の算定においては一定の前提条件等を採用しているため、異なる前提条件等によった場合、当該価額が異なることもあります。また、「2.金融商品の時価等に関する事項」におけるデリバティブ取引に関する契約額等については、その金額自体がデリバティブ取引に係る市場リスクを示すものではありません。

2.金融商品の時価等に関する事項

連結貸借対照表計上額、時価及びこれらの差額は、次のとおりであります。なお、時価を把握することが極めて困難と認められる非上場株式等は、次表には含めておりません（(注2) 参照）。また、連結貸借対照表計上額的重要性が乏しい科目については、記載を省略しております。

	連結貸借対照表計上額	時価	差額
(1) 現金預け金	73,788	73,788	－
(2) 有価証券			
満期保有目的の債券	11,330	11,357	27
その他有価証券	130,984	130,984	－
(3) 貸出金	762,576		
貸倒引当金（＊1）	△2,749		
	759,826	771,383	11,557
資産計	975,929	987,513	11,584
(1) 預金	936,767	937,143	375
負債計	936,767	937,143	375
デリバティブ取引（＊2）			
ヘッジ会計が適用されていないもの	8	8	－
ヘッジ会計が適用されているもの	3	3	－
デリバティブ取引計	11	11	－

(＊1) 貸出金に対応する一般貸倒引当金及び個別貸倒引当金を控除しております。

(＊2) その他資産・負債に計上しているデリバティブ取引を一括して表示しております。デリバティブ取引によって生じた正味の債権・債務は純額で表示しております。

(注1) 金融商品の時価の算定方法

資産

(1) 現金預け金

満期のない預け金については、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額を時価としております。満期のある預け金については、満期までの約定期間がすべて短期であり、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額を時価としております。

(2) 有価証券

株式は取引所の価格、債券は取引所の価格又は取引金融機関等から提示された価格によっております。投資信託は、公表されている基準価格によっております。

私寡債は、将来キャッシュ・フローをリスクフリーレートに発行体の信用格付に応じた信用スプレッドを加味したイールドカーブで割り引いて時価を算出しております。

なお、保有目的ごとの有価証券に関する注記事項については、「(有価証券関係)」(P64) に記載しております。

(3) 貸出金

貸出金のうち、変動金利によるものは、短期間で市場金利を反映するため、貸出先の信用状態が実行後大きく異なっていない限り、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額を時価としております。固定金利によるものは、内部格付、期間に基づく区分ごとに、元利金の合計額を同様の新規貸出を行った場合に想定される利率で割り引いて時価を算定しております。なお、約定期間が短期間（1年以内）のものは、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額を時価としております。

また、破綻先、実質破綻先及び破綻懸念先に対する債権等については、担保の処分可能見込額及び保証による回収可能見込額等に基づいて貸倒見積高を算定しているため、時価は連結決算日における連結貸借対照表上の債権等計上額から貸倒引当金計上額を控除した金額に近似しており、当該価額を時価としております。

なお、貸出金のうち、当該貸出を担保資産の範囲内に限るなどの特性により、返済期限を設けていないものについては、返済見込み期間及び金利条件等から、時価は帳簿価額と近似しているものと想定されるため、帳簿価額を時価としております。

負債

(1) 預金

要求払預金については、連結決算日に要求された場合の支払額（帳簿価額）を時価とみなしております。また、定期預金の時価は、一定の期間ごとに区分して、将来のキャッシュ・フローを割り引いて現在価値を算定しております。その割引率は、新規に預金を受け入れる際に使用する利率を用いております。なお、預入期間が短期間（1年以内）のものは、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額を時価としております。

デリバティブ取引

デリバティブ取引については、「(デリバティブ取引関係)」(P66) に記載しております。

(注2) 時価を把握することが極めて困難と認められる金融商品の連結貸借対照表計上額は次のとおりであり、金融商品の時価情報の「資産 (2) その他有価証券」には含まれておりません。

(単位：百万円)	
区分	平成30年3月31日
① 非上場株式 (*1) (*2)	1,868
② 組合出資金 (*3)	525
合計	2,393

- (* 1) 非上場株式については、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから時価開示の対象とはしておりません。
- (* 2) 非上場株式について8百万円減損処理を行っております。
- (* 3) 組合出資金のうち、組合財産が非上場株式など時価を把握することが極めて困難と認められるもので構成されているものについては、時価開示の対象とはしておりません。

(注3) 金銭債権及び満期のある有価証券の連結決算日後の償還予定額
(単位：百万円)

	1年以内	1年超 3年以内	3年超 5年以内	5年超 7年以内	7年超 10年以内	10年超
預け金	58,458	—	—	—	—	—
有価証券						
満期保有目的の債券	2,516	4,024	4,140	650	—	—
うち国債	—	—	—	—	—	—
地方債	—	—	—	—	—	—
短期社債	—	—	—	—	—	—
社債	2,516	4,024	4,140	650	—	—
その他	—	—	—	—	—	—
その他有価証券のうち満期があるもの	24,536	29,509	28,498	10,700	9,902	12,362
うち国債	16,610	14,372	—	—	—	12,362
地方債	5,462	11,228	24,198	8,490	8,389	—
短期社債	—	—	—	—	—	—
社債	881	2,647	2,694	1,969	1,412	—
その他	1,581	1,262	1,605	241	100	—
貸出金 (*)	164,238	116,242	100,696	80,014	83,308	208,525
合計	249,750	149,776	133,334	91,365	93,210	220,887

(*) 貸出金のうち、破綻先、実質破綻先及び破綻懸念先に対する債権等、償還予定額が見込めない9,549百万円は含めておりません。なお、貸出金のうち期間の定めのないものについては、「1年以内」に含めて開示しております。

(注4) 社債、借入金及びその他の有利子負債の連結決算日後の返済予定額
(単位：百万円)

	1年以内	1年超 3年以内	3年超 5年以内	5年超 7年以内	7年超 10年以内	10年超
預金 (*)	777,613	138,789	20,364	—	—	—
合計	777,613	138,789	20,364	—	—	—

(*) 預金のうち、要求払預金については、「1年以内」に含めて開示しております。

(退職給付関係)

1.採用している退職給付制度の概要

当行及び連結子会社は、確定給付型の制度として、昭和62年10月より厚生年金基金制度及び退職一時金制度を設けておりましたが、厚生年金基金制度を確定企業年金基金制度に移行しております。

また、従業員の退職に際して割増退職金を支払う場合があります。

なお、提出会社の当行は退職給付信託を設定しております。

当行及び連結子会社は、厚生年金基金の代行部分について、平成14年7月25日に厚生労働大臣から将来分支給義務免除の認可を受けております。また、当行及び連結子会社は厚生年金基金の代行部分について、平成16年3月1日に厚生労働大臣から過去分返上の認可を受けました。

当行及び連結子会社は、平成26年4月1日に退職給付制度の一部について確定拠出年金制度へ移行しております。

2.確定給付制度

(1) 退職給付債務の期首残高と期末残高の調整表

(単位：百万円)	
退職給付債務の期首残高	6,996
勤務費用	284
利息費用	43
数理計算上の差異の発生額	△22
退職給付の支払額	△543
過去勤務費用の発生額	—
その他	—
退職給付債務の期末残高	6,759

(2) 年金資産の期首残高と期末残高の調整表

(単位：百万円)	
年金資産の期首残高	11,545
期待運用収益	315
数理計算上の差異の発生額	40
事業主からの拠出額	206
退職給付の支払額	△391
その他	26
年金資産の期末残高	11,742

(3) 退職給付債務及び年金資産の期末残高と連結貸借対照表に計上された退職給付に係る負債及び退職給付に係る資産の調整表

(単位：百万円)	
積立型制度の退職給付債務	5,034
年金資産	△11,742
	△6,708
非積立型制度の退職給付債務	1,724
連結貸借対照表に計上された負債と資産の純額	△4,983

(単位：百万円)	
退職給付に係る負債	1,724
退職給付に係る資産	△6,708
連結貸借対照表に計上された負債と資産の純額	△4,983

(4) 退職給付費用及びその内訳項目の金額

(単位：百万円)	
勤務費用	257
利息費用	43
期待運用収益	△315
数理計算上の差異の費用処理額	△225
過去勤務費用の費用処理額	—
その他	0
確定給付制度に係る退職給付費用	△239

(5) 退職給付に係る調整額

退職給付に係る調整額に計上した項目（税効果控除前）の内訳は次のとおりであります。

(単位：百万円)	
過去勤務費用	—
数理計算上の差異	161
その他	—
合計	161

(6) 退職給付に係る調整累計額

退職給付に係る調整累計額に計上した項目（税効果控除前）の内訳は次のとおりであります。

(単位：百万円)	
未認識過去勤務費用	—
未認識数理計算上の差異	△2,827
その他	—
合計	△2,827

(7) 年金資産に関する事項

① 年金資産合計に対する主な分類ごとの比率は、次のとおりであります。

債券	44%
株式	30%
現金及び預金	0%
その他	26%
合計	100%

(注) 年金資産合計には、企業年金制度に対して設定した退職給付信託が65%含まれております。

② 長期期待運用収益率の設定方法

年金資産の長期期待運用収益率を決定するため、現在及び予想される年金資産の配分と、年金資産を構成する多様な資産からの現在及び将来期待される長期の収益率を考慮しております。

(8) 数理計算上の計算基礎に関する事項

主要な数理計算上の計算基礎（加重平均で表わしております。）

割引率 0.53～0.66%
長期期待運用収益率 3.00%

3.確定拠出制度

当行及び連結子会社の確定拠出制度への要拠出額は62百万円であります。

(ストック・オプション等関係)

該当事項はありません。

(税効果会計関係)

1.繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

(単位：百万円)	
繰延税金資産	
貸倒引当金損金算入限度超過額	1,155
退職給付に係る資産	22
退職給付に係る負債	524
減価償却損金算入限度超過額	60
賞与引当金損金算入限度超過額	146
繰延資産償却損金算入限度超過額	64
有価証券償却損金不算入額	103
役員退職慰労金未払額	6
未払事業税	29
その他	290
繰延税金資産小計	2,403
評価性引当額等	△216
繰延税金資産合計	2,186
繰延税金負債	
その他有価証券評価差額金	△918
その他	△42
繰延税金負債合計	△960
繰延税金資産の純額	1,225

2.連結財務諸表提出会社の法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間に重要な差異があるときの、当該差異の原因となった主な項目別の内訳

法定実効税率 (調整)	30.69%
交際費等永久に損金に算入されない項目	2.21%
受取配当金等永久に益金に算入されない項目	△1.10%
評価性引当額	2.49%
その他	0.45%
税効果会計適用後の法人税等の負担率	34.74%

(資産除去債務関係)

該当事項はありません。

(賃貸等不動産関係)

該当事項はありません。

(関連当事者情報)

1.関連当事者との取引

- (1) 連結財務諸表提出会社と関連当事者との取引
- ① 連結財務諸表提出会社の親会社及び主要株主（会社等の場合に限る。）等
該当事項はありません。
- ② 連結財務諸表提出会社の非連結子会社及び関連会社等
該当事項はありません。
- ③ 連結財務諸表提出会社と同一の親会社をもつ会社等及び連結財務諸表提出会社のその他の関係会社の子会社等
該当事項はありません。

④ 連結財務諸表提出会社の役員及び主要株主（個人の場合に限る。）等

種類	会社等の名称又は氏名	所在地	資本金又は出資金 (百万円)	事業の内容又は職業	議決権等の所有（被所有）割合	関連当事者との関係	取引の内容	取引金額 (百万円)	科目	期末残高 (百万円)
役員及びその近親者	澤 志郎	—	—	当行監査役 日本交通銀行代表取締役	—	資金の貸付	資金の貸付 (注1)	—	貸出金	1,244

取引条件及び取引条件の決定方針等

注1.澤 志郎が第三者（日本交通株式会社）の代表者として行った取引であります。澤 志郎が平成29年6月27日の定時株主総会をもって辞任したため、同日付けで関連当事者でなくなっております。取引金額は関連当事者であった期間の取引を、期末残高は関連当事者に該当しなくなった時点の残高をそれぞれ記載しております。なお、資金の貸付等は一般的取引条件と同様に決定しております。

(2) 連結財務諸表提出会社の連結子会社と関連当事者との取引

- ① 連結財務諸表提出会社の親会社及び主要株主（会社等の場合に限る。）等
該当事項はありません。
- ② 連結財務諸表提出会社の非連結子会社及び関連会社等
該当事項はありません。
- ③ 連結財務諸表提出会社と同一の親会社をもつ会社等及び連結財務諸表提出会社のその他の関係会社の子会社等
該当事項はありません。
- ④ 連結財務諸表提出会社の役員及び主要株主（個人の場合に限る。）等
該当事項はありません。

2.親会社又は重要な関連会社に関する注記

(1) 親会社情報

該当事項はありません。

(2) 重要な関連会社の要約財務情報

該当事項はありません。

(1株当たり情報)

(単位：円)	
1株当たり純資産額	5,325.76
1株当たり当期純利益	118.00

(注) 1.平成28年10月1日付で普通株式10株を1株とする株式併合を実施いたしました。1株当たり純資産額及び1株当たり当期純利益は、前連結会計年度の期首に当該株式併合が行われたと仮定して算出しております。

2.1株当たり当期純利益の算定上の基礎は、次のとおりであります。

(単位：百万円)	
1株当たり当期純利益	
親会社株主に帰属する当期純利益	1,105
普通株主に帰属しない金額	—
普通株式に係る親会社株主に帰属する当期純利益	1,105
普通株式の期中平均株式数	9,364千株

3.潜在株式調整後1株当たり当期純利益については、潜在株式がないので記載していません。

(重要な後発事象)

平成30年5月11日開催の当行取締役会において、経営効率化を目的とした営業用資産の一部用途変更を決議いたしました。これに伴い、平成30年度において有形固定資産の減損損失113百万円を特別損失として計上する予定であります。

■セグメント情報等

(セグメント情報)

1.報告セグメントの概要

当行グループの報告セグメントは、当行グループの構成単位のうち分離された財務情報が入手可能であり、企業集団としての経営の見地から、経営資源の配分の決定及び業績を評価するために、定期的に検討を行う対象となっているものであります。

当行グループは、銀行業務を中心にクレジットカード業務などの金融サービスの提供を事業活動として展開しております。なお、「銀行業」、「カード事業」を報告セグメントとしております。

「銀行業」は、預金業務、貸出業務、有価証券投資業務、為替業務を中心とした銀行業務及びクレジットカード業務以外の金融サービス業務を行っております。「カード事業」はクレジットカード業務を行っております。

2.報告セグメントごとの経常収益、利益又は損失、資産、負債その他の項目の金額の算定方法

報告セグメント間の取引は主に貸出取引及び預金取引であり、一般的取引条件と同様に決定しております。

3.報告セグメントごとの経常収益、利益又は損失、資産、負債その他の項目の金額に関する情報

前連結会計年度（平成28年4月1日から平成29年3月31日まで）

	報告セグメント			調整額	連結財務諸表計上額
	銀行業	カード事業	合計		
経常収益					
(1)外部顧客に対する経常収益	15,809	383	16,192	－	16,192
(2)セグメント間の内部経常収益	32	12	44	△44	－
計	15,842	395	16,237	△44	16,192
セグメント利益	1,939	11	1,950	0	1,950
セグメント資産	1,008,756	1,632	1,010,389	△898	1,009,490
セグメント負債	959,111	1,397	960,509	△899	959,610
その他の項目					
減価償却費	1,347	0	1,347	－	1,347
資金運用収益	12,069	58	12,127	△14	12,113
資金調達費用	998	14	1,012	△13	998
持分法投資利益	8	－	8	－	8
持分法適用会社への投資額	4	2	6	－	6
有形固定資産及び無形固定資産の増加額	1,359	0	1,359	－	1,359

(注) 1.一般企業の売上高に代えて、それぞれ経常収益を記載しております。また、差異調整につきましては、セグメント利益と連結損益計算書の経常利益計上額の差異について記載しております。

2.調整額は次のとおりであります。

(1) セグメント利益の調整額0百万円は、セグメント間取引消去0百万円であります。

(2) セグメント資産の調整額△898百万円は、セグメント間債権債務消去△898百万円であります。

(3) セグメント負債の調整額△899百万円は、セグメント間債権債務消去△899百万円であります。

(4) 資金運用収益の調整額△14百万円は、セグメント間取引消去△14百万円であります。

(5) 資金調達費用の調整額△13百万円は、セグメント間取引消去△13百万円であります。

当連結会計年度（平成29年4月1日から平成30年3月31日まで）

	報告セグメント			調整額	連結財務諸表計上額
	銀行業	カード事業	合計		
経常収益					
(1)外部顧客に対する経常収益	15,023	378	15,401	－	15,401
(2)セグメント間の内部経常収益	28	20	48	△48	－
計	15,052	398	15,450	△48	15,401
セグメント利益	1,837	10	1,848	0	1,848
セグメント資産	1,011,762	1,700	1,013,462	△912	1,012,550
セグメント負債	962,048	1,455	963,504	△912	962,591
その他の項目					
減価償却費	876	0	876	－	876
資金運用収益	10,767	52	10,819	△12	10,807
資金調達費用	637	12	650	△12	637
持分法投資利益	5	－	5	－	5
持分法適用会社への投資額	4	2	6	－	6
有形固定資産及び無形固定資産の増加額	726	2	728	－	728

(注) 1.一般企業の売上高に代えて、それぞれ経常収益を記載しております。また、差異調整につきましては、セグメント利益と連結損益計算書の経常利益計上額の差異について記載しております。

2.調整額は次のとおりであります。

(1) セグメント利益の調整額0百万円は、セグメント間取引消去0百万円であります。

(2) セグメント資産の調整額△912百万円は、セグメント間債権債務消去△912百万円であります。

(3) セグメント負債の調整額△912百万円は、セグメント間債権債務消去△912百万円であります。

(4) 資金運用収益の調整額△12百万円は、セグメント間取引消去△12百万円であります。

(5) 資金調達費用の調整額△12百万円は、セグメント間取引消去△12百万円であります。

(関連情報)

前連結会計年度（平成28年4月1日から平成29年3月31日まで）

1.サービスごとの情報

	貸出業務	有価証券投資業務	その他	合計
外部顧客に対する経常収益	9,708	3,221	3,262	16,192

(注) 一般企業の売上高に代えて、経常収益を記載しております。

2.地域ごとの情報

(1) 経常収益

当行グループは、本邦の外部顧客に対する経常収益に区分した金額が連結損益計算書の経常収益の90％を超えるため、記載を省略しております。

(2) 有形固定資産

当行グループは、連結貸借対照表の有形固定資産の金額すべてが本邦に所在しているため、記載を省略しております。

3.主要な顧客ごとの情報

特定の顧客に対する経常収益で連結損益計算書の経常収益の10％以上を占めるものがないため、記載を省略しております。

当連結会計年度（平成29年4月1日から平成30年3月31日まで）

1.サービスごとの情報

	貸出業務	有価証券投資業務	その他	合計
外部顧客に対する経常収益	9,187	2,599	3,615	15,401

(注) 一般企業の売上高に代えて、経常収益を記載しております。

2.地域ごとの情報

(1) 経常収益

当行グループは、本邦の外部顧客に対する経常収益に区分した金額が連結損益計算書の経常収益の90％を超えるため、記載を省略しております。

(2) 有形固定資産

当行グループは、連結貸借対照表の有形固定資産の金額すべてが本邦に所在しているため、記載を省略しております。

3.主要な顧客ごとの情報

特定の顧客に対する経常収益で連結損益計算書の経常収益の10％以上を占めるものがないため、記載を省略しております。

(報告セグメントごとの固定資産の減損損失に関する情報)

前連結会計年度（平成28年4月1日から平成29年3月31日まで）

	報告セグメント		
	銀行業	カード事業	合計
減損損失	3	－	3

当連結会計年度（平成29年4月1日から平成30年3月31日まで）

	報告セグメント		
	銀行業	カード事業	合計
減損損失	143	－	143

(報告セグメントごとののれんの償却額及び未償却残高に関する情報)

前連結会計年度（平成28年4月1日から平成29年3月31日まで）

該当事項はありません。

当連結会計年度（平成29年4月1日から平成30年3月31日まで）

該当事項はありません。

(報告セグメントごとの負ののれん発生益に関する情報)

前連結会計年度（平成28年4月1日から平成29年3月31日まで）

該当事項はありません。

当連結会計年度（平成29年4月1日から平成30年3月31日まで）

該当事項はありません。

■連結リスク管理債権

項目	前連結会計年度 (平成29年3月31日現在)	当連結会計年度 (平成30年3月31日現在)
破綻先債権額	112	216
延滞債権額	9,798	9,329
3カ月以上延滞債権額	88	78
貸出条件緩和債権額	1,354	1,006
合計	11,354	10,631

■主要な経営指標等の推移

(単位：百万円)

	平成25年度 (自平成25年4月1日 至平成26年3月31日)	平成26年度 (自平成26年4月1日 至平成27年3月31日)	平成27年度 (自平成27年4月1日 至平成28年3月31日)	平成28年度 (自平成28年4月1日 至平成29年3月31日)	平成29年度 (自平成29年4月1日 至平成30年3月31日)
経常収益	17,696	16,914	16,604	15,834	15,046
経常利益	2,670	3,329	3,363	1,931	1,832
当期純利益	1,536	2,185	2,107	1,294	1,094
資本金	9,061	9,061	9,061	9,061	9,061
発行済株式総数	96,199千株	96,199千株	96,199千株	9,619千株	9,619千株
純資産額	42,352	48,080	49,105	47,450	47,555
総資産額	960,462	971,586	991,358	1,006,419	1,009,485
預金残高	883,082	886,253	908,450	926,898	936,789
貸出金残高	674,375	704,198	721,999	738,946	763,116
有価証券残高	194,975	185,088	153,018	166,798	144,473
1株当たり純資産額	449円16銭	513円26銭	5,242円43銭	5,066円43銭	5,078円10銭
1株当たり配当額	5円50銭	6円00銭	6円00銭	33円00銭	60円00銭
(内1株当たり中間配当額)	(2円50銭)	(3円00銭)	(3円00銭)	(3円00銭)	(30円00銭)
1株当たり当期純利益	16円28銭	23円20銭	224円93銭	138円24銭	116円83銭
潜在株式調整後1株当たり 当期純利益	－円	－円	－円	－円	－円
自己資本比率	4.4%	4.9%	4.9%	4.7%	4.7%
単体自己資本比率（国内基準）	10.93%	10.65%	10.76%	9.58%	9.40%
自己資本利益率	3.57%	5.00%	4.71%	2.77%	2.32%
株価収益率	11.42倍	10.99倍	7.51倍	12.65倍	14.64倍
配当性向	33.78%	25.86%	26.67%	43.40%	51.35%
従業員数	649人	677人	683人	695人	683人
(外、平均臨時従業員数)	(172人)	(212人)	(225人)	(227人)	(233人)

(注) 1.消費税及び地方消費税の会計処理は、税抜方式によっております。
2.平成29年度中間配当についての取締役会決議は平成29年11月10日に行いました。
3.平成28年10月1日付で普通株式10株を1株とする株式併合を実施いたしました。1株当たり純資産額及び1株当たり当期純利益は、平成27年度の期首に当該株式併合が行われたと仮定して算出しております。また、配当性向は、平成28年度の期首に株式併合が行われたと仮定して算出しております。
4.平成28年10月1日付で普通株式10株を1株とする株式併合を実施いたしました。平成28年度の1株当たり配当額33円は、中間配当額3円と期末配当額30円の合計となり、中間配当額3円は株式併合前の配当額、期末配当額30円は株式併合後の配当額となります。
5.自己資本比率は、期末純資産の部合計を期末資産の部合計で除して算出しております。
6.単体自己資本比率は、銀行法第14条の2の規定に基づく平成18年金融庁告示第19号に定められた算式に基づき算出しております。当行は、国内基準を採用しております。



財務諸表

■貸借対照表

<資産の部>

(単位：百万円)

区分	前事業年度 (平成29年3月31日)	当事業年度 (平成30年3月31日)
現金預け金	64,547	73,788
現金	14,268	15,329
預け金	50,279	58,458
有価証券	166,798	144,473
国債	55,316	43,344
地方債	60,672	57,769
社債	19,570	20,934
株式	6,266	6,118
外国証券	1,035	—
その他の証券	23,937	16,305
貸出金	738,946	763,116
割引手形	1,996	1,775
手形貸付	15,627	16,566
証書貸付	645,653	661,477
当座貸越	75,669	83,296
外国為替	426	501
外国他店預け	284	366
取立外国為替	142	135
その他資産	13,640	4,580
前払費用	72	75
未収収益	1,029	1,064
金融派生商品	84	126
金融商品等差入担保金	2,300	2,300
劣後受益権	9,458	—
その他の資産	694	1,013
有形固定資産	11,776	11,379
建物	3,400	3,302
土地	7,017	6,888
リース資産	1,091	951
建設仮勘定	—	7
その他の有形固定資産	266	229
無形固定資産	618	715
ソフトウェア	354	502
リース資産	216	165
その他の無形固定資産	47	46
前払年金費用	3,132	3,760
繰延税金資産	2,118	2,129
支払承諾見返	7,287	8,668
貸倒引当金	△2,858	△3,613
投資損失引当金	△14	△15
資産の部合計	1,006,419	1,009,485

<負債の部>

(単位：百万円)

区分	前事業年度 (平成29年3月31日)	当事業年度 (平成30年3月31日)
預金	926,898	936,789
当座預金	28,085	29,323
普通預金	384,985	413,424
貯蓄預金	4,204	4,313
通知預金	3,080	2,528
定期預金	500,096	482,051
定期積金	1,821	1,818
その他の預金	4,624	3,329
コールマネー	58	56
借入金	14,000	8,700
借入金	14,000	8,700
その他負債	7,719	4,702
未払法人税等	532	244
未払費用	849	717
前受収益	449	433
給付補填備金	0	0
金融派生商品	74	114
リース債務	1,449	1,251
その他の負債	4,362	1,939
賞与引当金	470	479
退職給付引当金	1,564	1,596
偶発損失引当金	293	265
睡眠預金払戻損失引当金	45	39
再評価に係る繰延税金負債	631	631
支払承諾	7,287	8,668
負債の部合計	958,969	961,930

<純資産の部>

(単位：百万円)

区分	前事業年度 (平成29年3月31日)	当事業年度 (平成30年3月31日)
資本金	9,061	9,061
資本剰余金	6,452	6,452
資本準備金	6,452	6,452
利益剰余金	29,025	29,553
利益準備金	2,628	2,628
その他利益剰余金	26,397	26,925
別途積立金	24,645	25,645
繰越利益剰余金	1,752	1,280
自己株式	△671	△673
株主資本合計	43,867	44,394
その他有価証券評価差額金	2,523	2,097
繰延ヘッジ損益	△0	0
土地再評価差額金	1,058	1,062
評価・換算差額等合計	3,582	3,160
純資産の部合計	47,450	47,555
負債及び純資産の部合計	1,006,419	1,009,485

■損益計算書

(単位：百万円)		
区分	前事業年度 (自平成28年4月1日 至平成29年3月31日)	当事業年度 (自平成29年4月1日 至平成30年3月31日)
経常収益	15,834	15,046
資金運用収益	12,069	10,767
貸出金利息	9,611	9,112
有価証券利息配当金	2,260	1,410
コールローン利息	0	0
預け金利息	41	43
その他の受入利息	156	200
役務取引等収益	2,485	2,283
受入為替手数料	636	632
その他の役務収益	1,849	1,651
その他業務収益	897	1,519
外国為替売買益	42	42
商品有価証券売買益	0	0
国債等債券売却益	837	876
金融派生商品収益	4	7
その他の業務収益	13	593
その他経常収益	381	476
償却債権取立益	114	101
株式等売却益	70	253
その他の経常収益	196	121
経常費用	13,902	13,214
資金調達費用	998	637
預金利息	647	535
コールマネー利息	0	0
借入金利息	52	50
社債利息	143	－
金利スワップ支払利息	142	42
その他の支払利息	11	9
役務取引等費用	1,300	1,296
支払為替手数料	175	180
その他の役務費用	1,125	1,116
その他業務費用	189	483
その他の業務費用	189	483
営業経費	10,925	9,834
その他経常費用	488	962
貸倒引当金繰入額	2	839
貸出金償却	304	31
株式等売却損	－	49
株式等償却	0	8
その他の経常費用	181	33
経常利益	1,931	1,832
特別損失	8	149
固定資産処分損	5	6
その他の特別損失	3	143
税引前当期純利益	1,922	1,682
法人税、住民税及び事業税	912	412
法人税等調整額	△285	175
法人税等合計	627	588
当期純利益	1,294	1,094

■株主資本等変動計算書

前事業年度（自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日）					(単位：百万円)		
	株主資本						
	資本金	資本剰余金		利益準備金	利益剰余金		利益剰余金 合計
		資本準備金	資本剰余金 合計		その他利益剰余金		
					別途積立金	繰越利益 剰余金	
当期首残高	9,061	6,452	6,452	2,628	23,145	2,519	28,292
当期変動額							
剰余金の配当					1,500	△2,061	△561
当期純利益						1,294	1,294
自己株式の取得							
自己株式の処分						△0	△0
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）							
当期変動額合計	－	－	－	－	1,500	△767	732
当期末残高	9,061	6,452	6,452	2,628	24,645	1,752	29,025

	株主資本		評価・換算差額等				純資産合計
	自己株式	株主資本合計	その他有価証券 評価差額金	繰延ヘッジ 損益	土地再評価 差額金	評価・換算 差額等合計	
当期首残高	△669	43,137	4,908	△0	1,058	5,967	49,105
当期変動額							
剰余金の配当		△561					△561
当期純利益		1,294					1,294
自己株式の取得	△2	△2					△2
自己株式の処分	0	0					0
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）			△2,385	△0	－	△2,385	△2,385
当期変動額合計	△2	730	△2,385	△0	－	△2,385	△1,654
当期末残高	△671	43,867	2,523	△0	1,058	3,582	47,450

(単位：百万円)							
	株主資本						
	資本金	資本剰余金		利益準備金	利益剰余金		利益剰余金 合計
		資本準備金	資本剰余金 合計		別途積立金	繰越利益 剰余金	
当期首残高	9,061	6,452	6,452	2,628	24,645	1,752	29,025
当期変動額							
剰余金の配当					1,000	△1,561	△561
当期純利益						1,094	1,094
自己株式の取得							
土地再評価差額金の取崩						△3	△3
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）							
当期変動額合計	－	－	－	－	1,000	△471	528
当期末残高	9,061	6,452	6,452	2,628	25,645	1,280	29,553

	株主資本		評価・換算差額等				純資産合計
	自己株式	株主資本合計	その他有価証券 評価差額金	繰延ヘッジ 損益	土地再評価 差額金	評価・換算 差額等合計	
当期首残高	△671	43,867	2,523	△0	1,058	3,582	47,450
当期変動額							
剰余金の配当		△561					△561
当期純利益		1,094					1,094
自己株式の取得	△1	△1					△1
土地再評価差額金の取崩		△3					△3
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）			△425	0	3	△421	△421
当期変動額合計	△1	526	△425	0	3	△421	105
当期末残高	△673	44,394	2,097	0	1,062	3,160	47,555



財務諸表

注記事項（当事業年度（平成29年4月1日から平成30年3月31日まで）（重要な会計方針））

1.商品有価証券の評価基準及び評価方法

商品有価証券の評価は、時価法（売却原価は主として移動平均法により算定）により行っております。

2.有価証券の評価基準及び評価方法

(1) 有価証券の評価は、満期保有目的の債券については移動平均法による償却原価法（定額法）、子会社株式及び関連会社株式については移動平均法による原価法、その他有価証券については原則として決算日の市場価格等に基づく時価法（売却原価は主として移動平均法により算定）、ただし時価を把握することが極めて困難と認められるものについては移動平均法による原価法により行っております。
なお、その他有価証券の評価差額については、全部純資産直入法により処理しております。

(2) 有価証券運用を主目的とする単独運用の金銭の信託において信託財産として運用されている有価証券の評価は、時価法により行っております。

3.デリバティブ取引の評価基準及び評価方法

デリバティブ取引の評価は、時価法により行っております。

4.固定資産の減価償却の方法

(1) 有形固定資産（リース資産を除く）

有形固定資産は、定率法（ただし、平成10年4月1日以後に取得した建物（建物附属設備を除く。）並びに平成28年4月1日以後に取得した建物附属設備及び構築物については定額法）を採用しております。

なお、主な耐用年数は次のとおりであります。

建物 6年～50年
その他 2年～20年

(2) 無形固定資産（リース資産を除く）

無形固定資産は、定額法により償却しております。なお、自社利用のソフトウェアについては、行内における利用可能期間（主として5年）に基づいて償却しております。

(3) リース資産

所有権移転外ファイナンス・リース取引に係る「有形固定資産」及び「無形固定資産」中のリース資産は、リース期間を耐用年数とした定額法により償却しております。なお、残存価額については、リース契約上に残価保証の取決めがあるものは当該残価保証額とし、それ以外のものは零としております。

5.繰延資産の処理方法

社債発行費及び株式交付費は、支出時に全額費用として処理しております。

6.外貨建の資産及び負債の本邦通貨への換算基準

外貨建資産・負債は、決算日の為替相場による円換算額を付しております。

7.引当金の計上基準

(1) 貸倒引当金

貸倒引当金は、予め定めている償却・引当基準に則り、次のとおり計上しております。
破産、特別清算等法的に経営破綻の事実が発生している債務者（以下「破綻先」という。）に係る債権及びそれと同等の状況にある債務者（以下「実質破綻先」という。）に係る債権については、以下のなお書きに記載されている直接減額後の帳簿価額から、担保の処分可能見込額及び保証による回収可能見込額を控除し、その残額を計上しております。
また、現在は経営破綻の状況にないが、今後経営破綻に陥る可能性が大きいと認められる債務者に係る債権については、債権額から、担保の処分可能見込額及び保証による回収可能見込額を控除し、その残額のうち、債務者の支払能力を総合的に判断し必要と認める額を計上しております。
上記以外の債権については、過去の一定期間における貸倒実績から算出した貸倒実績率等に基づき計上しております。
すべての債権は、資産の自己査定基準に基づき、営業関連部署が資産査定を実施し、当該部署から独立した資産監査部署が査定結果を監査しております。
なお、破綻先及び実質破綻先に対する担保・保証付債権等については、債権額から担保の評価額及び保証による回収が可能と認められる額を控除した残額を取立不能見込額として債権額から直接減額しており、その金額は1,009百万円であります。

(2) 投資損失引当金

投資損失引当金は、投資に対する損失に備えるため、有価証券の発行会社の財政状態等を勘案して必要と認められる額を計上しております。

(3) 賞与引当金

賞与引当金は、従業員への賞与の支払に備えるため、従業員に対する賞与の支給見込額のうち、当事業年度に帰属する額を計上しております。

(4) 退職給付引当金

退職給付引当金は、従業員の退職給付に備えるため、当事業年度末における退職給付債務及び年金資産の見込額に基づき、必要額を計上しております。また、退職給付債務の算定に当たり、退職給付見込額を当事業年度末までの期間に帰属させる方法については給付算定式基準によっております。なお、過去勤務費用及び数理計算上の差異の損益処理方法は次のとおりであります。

過去勤務費用：その発生時の従業員の平均残存勤務期間内の一定の年数（主として5年）による定額法により損益処理

数理計算上の差異：各事業年度の発生時の従業員の平均残存勤務期間内の一定の年数（主として10年）による定額法により按分した額を、それぞれ発生の翌事業年度から損益処理

(5) 睡眠預金払戻損失引当金

睡眠預金払戻損失引当金は、利益計上した睡眠預金について、預金者からの払戻損失に備えるため、過去実績に基づく将来の払戻損失見込額を計上しております。

(6) 偶発損失引当金

偶発損失引当金は、信用保証協会の責任共有制度の導入により、将来発生する負担金の支払に備えるため、必要額を計上しております。

8.ヘッジ会計の方法

(1) 金利リスク・ヘッジ

金融資産・負債から生じる金利リスクに対するヘッジ会計の方法は、「銀行業における金融商品会計基準適用に関する会計上及び監査上の取扱い」（日本公認会計士協会業種別監査委員会報告第24号 平成14年2月13日）に規定する繰延ヘッジによっております。ヘッジ有効性評価の方法については、相場変動を相殺するヘッジについて、ヘッジ対象となる預金・貸出金等とヘッジ手段である金利スワップ取引等を一定の（残存）期間毎にグルーピングのうえ特定し評価しております。また、キャッシュ・フローを固定するヘッジについては、ヘッジ対象とヘッジ手段の金利変動要素の相関関係の検証により有効性の評価をしております。

(2) 為替変動リスク・ヘッジ

外貨建金融資産・負債から生じる為替変動リスクに対するヘッジ会計の方法は、「銀行業における外貨建取引等の会計処理に関する会計上及び監査上の取扱い」（日本公認会計士協会業種別監査委員会報告第25号 平成14年7月29日）に規定する繰延ヘッジによっております。ヘッジ有効性評価の方法については、外貨建金銭債権債務等の為替変動リスクを減殺する目的で行う通貨スワップ取引及び為替スワップ取引等をヘッジ手段とし、ヘッジ対象である外貨建金銭債権債務等に見合うヘッジ手段の外貨ポジション相当額が存在することを確認することによりヘッジの有効性を評価しております。

9.その他財務諸表作成のための基本となる重要な事項

(1) 退職給付に係る会計処理

退職給付に係る未認識数理計算上の差異及び未認識過去勤務費用の会計処理の方法は、連結財務諸表におけるこれらの会計処理の方法と異なっております。

(2) 消費税等の会計処理

消費税及び地方消費税の会計処理は、税抜方式によっております。ただし、有形固定資産に係る控除対象外消費税等は当事業年度の費用に計上しております。

(貸借対照表関係)

1.関係会社の株式又は出資金の総額

株 式 82百万円
出資金 241百万円

2.貸出金のうち破綻先債権額及び延滞債権額は次のとおりであります。

破綻先債権額 211百万円
延滞債権額 9,290百万円

なお、破綻先債権とは、元本又は利息の支払の遅延が相当期間継続していることその他の事由により元本又は利息の取立て又は弁済の見込みがないものとして未収利息を計上しなかった貸出金（貸倒償却を行った部分を除く。以下「未収利息不計上貸出金」という。）のうち、法人税法施行令（昭和40年政令第97号）第96条第1項第3号イからホまでに掲げる事由又は同項第4号に規定する事由が生じている貸出金であります。

また、延滞債権とは、未収利息不計上貸出金であって、破綻先債権及び債務者の経営再建又は支援を図ることを目的として利息の支払を猶予した貸出金以外の貸出金であります。

3.貸出金のうち3カ月以上延滞債権額は次のとおりであります。

3カ月以上延滞債権額 78百万円

なお、3カ月以上延滞債権とは、元本又は利息の支払が、約定支払日の翌日から3月以上遅延している貸出金で破綻先債権及び延滞債権に該当しないものであります。

4.貸出金のうち貸出条件緩和債権額は次のとおりであります。

貸出条件緩和債権額 1,001百万円
なお、貸出条件緩和債権とは、債務者の経営再建又は支援を図ることを目的として、金利の減免、利息の支払猶予、元本の返済猶予、債権放棄その他の債務者に有利となる取決めを行った貸出金で破綻先債権、延滞債権及び3カ月以上延滞債権に該当しないものであります。

5.破綻先債権額、延滞債権額、3カ月以上延滞債権額及び貸出条件緩和債権額の合計額は次のとおりであります。

合計額 10,582百万円
なお、上記2.から5.に掲げた債権額は、貸倒引当金控除前の金額であります。

6.手形割引は、「銀行業における金融商品会計基準適用に関する会計上及び監査上の取扱い」（日本公認会計士協会業種別監査委員会報告第24号 平成14年2月13日）に基づき金融取引として処理しております。これにより受け入れた銀行引受手形、商業手形、荷付為替手形及び買入外国為替等は、売却又は（再）担保という方法で自由に処分できる権利を有しておりますが、その額面金額は次のとおりであります。

1,775百万円

7.担保に供している資産は次のとおりであります。

担保に供している資産
有価証券 19,559百万円
計 19,559百万円

担保資産に対応する債務

預 金 911百万円
借入金 5,700百万円

上記のほか、為替決済の取引の担保あるいは先物取引証拠金等の代用として、次のものを差し入れております。

有価証券 11,092百万円
また、その他の資産には、保証金が含まれておりますが、その金額は次のとおりであります。
保証金 326百万円

8.当座貸越契約及び貸付金に係るコミットメントライン契約は、顧客からの融資実行の申し出を受けた場合に、契約上規定された条件について違反がない限り、一定の限度額まで資金を貸付けることを約する契約であります。これらの契約に係る融資未実行残高は次のとおりであります。

融資未実行残高 229,016百万円
うち契約残存期間が1年以内のもの 229,016百万円

なお、これらの契約の多くは、融資実行されずに終了するものであるため、融資未実行残高そのものが必ずしも当行の将来のキャッシュ・フローに影響を与えるものではありません。これらの契約の多くには、金融情勢の変化、債権の保全及びその他相当の事由があるときは、当行が実行申し込みを受けた融資の拒絶又は契約極度額の減額をすることができ旨の条項が付けられております。また、契約時において必要に応じて不動産・有価証券等の担保を徴求するほか、契約後も定期的に（半年毎に）予め定めている行内手続に基づき顧客の業況等を把握し、必要に応じて契約の見直し、与信保全上の措置等を講じております。

9.有形固定資産の圧縮記帳

圧縮記帳額 2,838百万円

10.借入金には、他の債務よりも債務の履行が後順位である旨の特約が付された劣後特約付借入金が含まれております。

劣後特約付借入金 3,000百万円

11.「有価証券」中の社債のうち、有価証券の私募（金融商品取引法第2条第3項）による社債に対する保証債務の額 11,330百万円

12.取締役及び監査役との間の取引による取締役及び監査役に対する金銭債権総額 10百万円



財務諸表

(損益計算書関係)

1.営業経費には、次のものを含んでおります。	
給料・手当	4,918百万円
土地建物機械賃借料	623百万円
減価償却費	876百万円
2.その他の経常費用は、次のとおりであります。	
雑損	3百万円
偶発損失引当金繰入額	17百万円
睡眠預金払戻損失引当金繰入額	10百万円
投資損失引当金繰入額	1百万円
3.その他の特別損失は、次のとおりであります。	
減損損失	143百万円

(有価証券関係)

子会社株式及び関連会社株式

時価のある子会社株式及び関連会社株式はありません。

(注)時価を把握することが極めて困難と認められる子会社株式及び関連会社株式の貸借対照表計上額

(単位：百万円)

	当事業年度 (平成30年3月31日)
子会社株式	78
関連会社株式	4
合計	82

これらについては、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから、「子会社株式及び関連会社株式」には含めておりません。

(税効果会計関係)

1.繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

(単位：百万円)

繰延税金資産	
貸倒引当金損金算入限度超過額	1,142
退職給付引当金損金算入限度超過額	2,741
有形固定資産減価償却損金算入限度超過額	60
賞与引当金損金算入限度超過額	145
繰延資産償却損金算入限度超過額	64
有価証券償却損金不算入額	103
役員退職慰労金未払額	6
未払事業税	29
その他	282
繰延税金資産小計	4,575
評価性引当額	△192
繰延税金資産合計	4,383
繰延税金負債	
退職給付信託分	△1,335
その他有価証券評価差額金	△918
その他	△0
繰延税金負債合計	△2,253
繰延税金資産の純額	2,129

2.法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間に重要な差異があるときの、当該差異の原因となった主な項目別の内訳

法定実効税率	30.69%
(調整)	
交際費等永久に損金に算入されない項目	2.23%
受取配当金等永久に益金に算入されない項目	△1.11%
評価性引当額	2.61%
その他	0.55%
税効果会計適用後の法人税等の負担率	34.97%

(重要な後発事象)

平成30年5月11日開催の当行取締役会において、経営効率化を目的とした営業用資産の一部用途変更を決議いたしました。これに伴い、平成30年度において有形固定資産の減損損失113百万円を特別損失として計上する予定であります。



損益の状況

■業務粗利益等

(単位：百万円)

	平成29年3月期			平成30年3月期		
	国内業務部門	国際業務部門	合計	国内業務部門	国際業務部門	合計
資金運用収益	12,031	39	12,069 ¹	10,736	31	10,767 ⁰
資金調達費用	997	2	998 ¹	635	2	637 ⁰
資金運用収支	11,033	37	11,070	10,100	28	10,129
役務取引等収益	2,452	32	2,485	2,249	34	2,283
役務取引等費用	1,288	11	1,300	1,284	11	1,296
役務取引等収支	1,163	21	1,185	964	22	987
その他業務収益	855	42	897	1,477	42	1,519
その他業務費用	189	—	189	483	—	483
その他業務収支	666	42	708	993	42	1,035
業務粗利益	12,863	100	12,964	12,058	93	12,152
業務粗利益率 (%)	1.38	6.05	1.39	1.27	7.04	1.28

(注) 1.国内業務部門は国内店の円建取引、国際業務部門は国内店の外貨建取引であります。ただし、円建対非居住者取引等は国際業務部門に含めております。

2.資金運用収益及び資金調達費用の合計欄の上段の計数は、国内業務部門と国際業務部門の間の資金貸借の利息であります。

3.業務粗利益率 = $\frac{\text{業務粗利益}}{\text{資金運用勘定平均残高}} \times 100$

■業務純益

(単位：百万円)

	平成29年3月期	平成30年3月期
業務純益	2,228	2,112

業務純益…預金、貸出金、有価証券などの利息収支を示す「資金運用収支」、各種手数料などの収支を示す「役務取引等収支」、債券や外国為替など売買損益を示す「その他業務収支」の3つを合計した「業務粗利益」から「経費」を控除したものです。
銀行の基本的な業務での成果を示す利益指標であります。

■資金運用・調達勘定の平均残高、利息、利回り

(単位：百万円)

		平成29年3月期			平成30年3月期		
		国内業務部門	国際業務部門	合計	国内業務部門	国際業務部門	合計
資金運用勘定	平均残高	(1,127) 926,583	1,666	927,122	(851) 943,149	1,333	943,631
	利息	(1) 12,031	39	12,069	0 10,736	31	10,767
	利回り (%)	1.29	2.37	1.30	1.13	2.38	1.14
資金調達勘定	平均残高	915,356	(1,127) 1,683	915,913	930,646	(851) 1,351	931,146
	利息	997	(1) 2	998	635	0 2	637
	利回り (%) 等	0.10	0.15	0.10	0.06	0.21	0.06

■役務取引の状況

(単位：百万円)

	平成29年3月期			平成30年3月期		
	国内業務部門	国際業務部門	合計	国内業務部門	国際業務部門	合計
役務取引等収益	2,452	32	2,485	2,249	34	2,283
うち預金・貸出業務	501	—	501	477	—	477
うち為替業務	608	32	640	602	34	636
うち証券関連業務	348	—	348	418	—	418
うち代理業務	257	—	257	249	—	249
うち保護預り・貸金庫業務	16	—	16	17	—	17
うち保証業務	50	0	51	62	0	63
うちその他	669	—	669	420	—	420
役務取引等費用	1,288	11	1,300	1,284	11	1,296
うち為替業務	163	11	175	168	11	180



損益の状況

■その他業務収支の内訳

(単位：百万円)

	平成29年3月期			平成30年3月期		
	国内業務部門	国際業務部門	合計	国内業務部門	国際業務部門	合計
外国為替売買損益	—	42	42	—	42	42
商品有価証券売買損益	0	—	0	0	—	0
国債等債券売買損益	837	—	837	876	—	876
国債等債券償還損益	—	—	—	—	—	—
国債等債券償却損益	—	—	—	—	—	—
その他	△ 171	—	△ 171	117	—	117
合計	666	42	708	993	42	1,035

■受取利息・支払利息の分析

(単位：百万円)

	平成29年3月期			平成30年3月期		
	国内業務部門	国際業務部門	合計	国内業務部門	国際業務部門	合計
受取利息						
残高による増減	97	△ 59	99	211	△ 8	211
利率による増減	△ 1,052	△ 6	△ 1,117	△ 1,506	0	△ 1,513
純増減	△ 955	△ 66	△ 1,018	△ 1,295	△ 8	△ 1,302
支払利息						
残高による増減	8	△ 3	8	16	0	16
利率による増減	△ 156	0	△ 156	△ 378	0	△ 377
純増減	△ 148	△ 3	△ 148	△ 362	—	△ 361

(注) 残高及び利率の増減要因が重なる部分については、両者の増減割合に応じて按分しております。

■営業経費の内訳

(単位：百万円)

	平成29年3月期	平成30年3月期
給料・手当	4,938	4,918
退職金	1	—
退職給付費用	15	△ 178
福利厚生費	55	63
減価償却費	1,347	876
土地建物機械賃借料	605	623
営繕費	59	57
消耗品費	174	154
給水光熱費	103	109
旅費	45	52
通信費	253	239
広告宣伝費	218	167
租税公課	710	580
その他	2,396	2,170
計	10,925	9,834

(注) 損益計算書中の「営業経費」の内訳であります。



経営効率

■利鞘

(単位：％)

	平成29年3月期			平成30年3月期		
	国内業務部門	国際業務部門	合計	国内業務部門	国際業務部門	合計
資金運用利回り	1.29	2.37	1.30	1.13	2.38	1.14
資金調達原価	1.29	3.75	1.30	1.11	5.11	1.12
総資金利鞘	0.00	△ 1.38	0.00	0.02	△ 2.73	0.02

■預貸率

(単位：％)

	平成29年3月期			平成30年3月期		
	国内業務部門	国際業務部門	合計	国内業務部門	国際業務部門	合計
期末	78.23	28.46	78.21	79.89	21.69	79.85
期中平均	79.21	24.81	79.18	79.45	26.42	79.42

(注) 預金には譲渡性預金を含んでおります。

■1店舗当たり預金・貸出金

(単位：百万円)

	平成29年3月期	平成30年3月期
	国内店	国内店
預金	14,043	14,193
貸出金	11,196	11,562

■利益率

(単位：％)

		平成29年3月期	平成30年3月期
総資産利益率	経常利益率	0.19	0.18
(ROA)	当期純利益率	0.13	0.11
資本利益率	経常利益率	4.14	3.89
(ROE)	当期純利益率	2.77	2.32

(注) 1. 総資産経常（当期純）利益率 = $\frac{\text{経常利益（当期純利益）}}{\text{総資産（除く支払承諾見返）平均残高}} \times 100$

2. 資本経常（当期純）利益率 = $\frac{\text{経常利益（当期純利益）}}{\text{純資産勘定平均残高}} \times 100$

■預証率

(単位：％)

	平成29年3月期			平成30年3月期		
	国内業務部門	国際業務部門	合計	国内業務部門	国際業務部門	合計
期末	17.89	258.00	17.99	15.43	—	15.42
期中平均	17.15	203.20	17.25	16.57	164.66	16.64

(注) 預金には譲渡性預金を含んでおります。

■従業員1人当たり預金・貸出金

(単位：百万円)

	平成29年3月期	平成30年3月期
	国内店	国内店
預金	1,333	1,371
貸出金	1,063	1,117

(注) 従業員数は期中平均人員であります。

■預金科目別残高

(単位：百万円、%)

	平成29年3月期				平成30年3月期			
	期末残高	構成比	平均残高	構成比	期末残高	構成比	平均残高	構成比
国内業務部門	926,497	99.9	895,558	99.9	936,283	99.9	915,997	99.9
流動性預金	420,355	45.3	400,059	44.6	449,590	48.0	426,665	46.6
うち有利息預金	392,270	42.3	373,548	41.7	420,267	44.8	398,453	43.4
定期性預金	501,918	54.1	493,322	55.0	483,869	51.6	487,107	53.1
うち固定金利定期預金	499,994	53.9	491,552	54.9	481,954	51.4	485,386	53.0
うち変動金利定期預金	101	0.0	106	0.0	96	0.0	99	0.0
その他の預金	4,223	0.5	2,176	0.3	2,822	0.3	2,224	0.2
国際業務部門	401	0.1	492	0.1	506	0.1	437	0.1
流動性預金	—	—	—	—	—	—	—	—
定期性預金	—	—	—	—	—	—	—	—
その他の預金	401	0.1	492	0.1	506	0.1	437	0.1
合計	926,898	100.0	896,050	100.0	936,789	100.0	916,434	100.0
譲渡性預金	—	—	—	—	—	—	—	0.0
総合計	926,898	100.0	896,050	100.0	936,789	100.0	916,434	100.0

(注) 1.流動性預金＝当座預金＋普通預金＋貯蓄預金＋通知預金
2.定期性預金＝定期預金＋定期積金
固定金利定期預金：預入時に満期日迄の利率が確定する定期預金
変動金利定期預金：預入期間中の市場金利の変化に応じて金利が変動する定期預金
3.国際業務部門の国内店外貨建取引の平均残高は、月次カレント方式により算出しております。

■個人・法人別預金残高

(単位：百万円)

	平成29年3月期	平成30年3月期
個人預金	644,161	647,860
法人預金	223,319	224,372
合計	867,481	872,233

■財形預金残高

(単位：百万円)

	平成29年3月期	平成30年3月期
財形預金	8,368	8,258

■定期預金の残存期間別残高

(単位：百万円)

	平成29年3月期						
	3ヵ月未満	3ヵ月以上 6ヵ月未満	6ヵ月以上 1年未満	1年以上 2年未満	2年以上 3年未満	3年以上	合計
定期預金	140,839	64,135	116,365	64,353	60,196	20,132	466,022
うち固定金利定期預金	140,827	64,132	116,344	64,320	60,155	20,132	465,913
うち変動金利定期預金	3	2	20	33	40	—	101
	平成30年3月期						
	3ヵ月未満	3ヵ月以上 6ヵ月未満	6ヵ月以上 1年未満	1年以上 2年未満	2年以上 3年未満	3年以上	合計
定期預金	105,861	92,054	114,535	56,916	57,676	20,332	447,377
うち固定金利定期預金	105,834	92,049	114,526	56,869	57,658	20,332	447,273
うち変動金利定期預金	18	4	8	46	17	—	96

(注) 本表の預金残高には、積立定期預金を含んでおりません。

■貸出金科目別残高

(単位：百万円)

	平成29年3月期		平成30年3月期	
	期末残高	平均残高	期末残高	平均残高
国内業務部門	738,832	724,533	763,006	740,550
手形貸付	15,513	16,315	16,456	15,505
証書貸付	645,653	634,848	661,477	644,132
当座貸越	75,669	71,511	83,296	79,286
割引手形	1,996	1,857	1,775	1,626
国際業務部門	114	122	109	115
手形貸付	114	122	109	115
証書貸付	—	—	—	—
合計	738,946	724,655	763,116	740,666

(注) 国際業務部門の国内店外貨建取引の平均残高は月次カレント方式により算出しております。

■貸出金業種別残高

(単位：百万円、%)

	平成29年3月期		平成30年3月期	
	残高	構成比	残高	構成比
国内店分 (除く特別国際金融取引勘定分)	738,946	100.00	763,116	100.00
製造業	62,432	8.45	60,369	7.91
農業、林業	1,224	0.17	1,829	0.24
漁業	219	0.03	196	0.03
鉱業、採石業、砂利採取業	114	0.02	49	0.01
建設業	19,491	2.64	19,448	2.55
電気・ガス・熱供給・水道業	12,099	1.64	14,058	1.84
情報通信業	1,951	0.26	1,943	0.25
運輸業、郵便業	6,158	0.83	7,395	0.97
卸売業、小売業	54,351	7.35	50,200	6.58
金融業、保険業	66,211	8.96	68,115	8.93
不動産業、物品賃貸業	115,100	15.58	122,909	16.10
その他サービス業	62,690	8.48	70,735	9.27
地方公共団体	167,074	22.61	164,723	21.58
その他	169,823	22.98	181,140	23.74
海外店分及び 特別国際金融取引勘定分	—	—	—	—
政府等	—	—	—	—
金融機関	—	—	—	—
商工業	—	—	—	—
その他	—	—	—	—
合計	738,946	100.00	763,116	100.00

■貸出金の残存期間別残高

(単位：百万円)

	平成29年3月期						
	1年以下	1年超 3年以下	3年超 5年以下	5年超 7年以下	7年超	期間の定め のないもの	合計
貸出金	39,583	47,154	83,061	58,449	434,728	75,968	738,946
うち変動金利	—	27,521	41,147	20,744	286,653	13,137	—
うち固定金利	—	19,633	41,913	37,705	148,075	62,830	—
	平成30年3月期						
	1年以下	1年超 3年以下	3年超 5年以下	5年超 7年以下	7年超	期間の定め のないもの	合計
貸出金	40,169	48,219	77,240	66,781	446,978	83,726	763,116
うち変動金利	—	26,830	31,140	26,823	295,794	12,877	—
うち固定金利	—	21,388	46,099	39,957	151,183	70,849	—

(注) 残存期間1年以下の貸出金については、変動金利、固定金利の区別をしております。

■貸出金担保別内訳

(単位：百万円)

	平成29年3月期	平成30年3月期
有価証券	2,204	2,292
債権	4,251	4,337
商品	—	—
不動産	153,296	158,267
その他	190	3,026
計	159,942	167,925
保証	278,029	285,876
信用	300,974	309,314
合計	738,946	763,116
(うち劣後特約貸出金)	(513)	856

■貸出金使途別内訳

(単位：百万円、%)

	平成29年3月期		平成30年3月期	
	貸出金残高	構成比	貸出金残高	構成比
設備資金	295,025	39.93	318,191	41.70
運転資金	443,921	60.07	444,925	58.30
合計	738,946	100.00	763,116	100.00

■支払承諾見返担保別内訳

(単位：百万円)

	平成29年3月期	平成30年3月期
有価証券	10	11
債権	10	0
商品	—	—
不動産	541	641
その他	200	200
計	762	853
保証	2,940	3,574
信用	3,584	4,240
合計	7,287	8,668

■特定海外債権残高

該当ありません。

■中小企業等貸出金残高

(単位：件、百万円)

平成29年3月期					
総貸出金残高 (A)		中小企業等貸出金残高 (B)		(B) / (A)	
貸出件数	金 額	貸出件数	金 額	貸出件数	金 額
41,671	738,946	41,480	441,069	99.54%	59.68%
平成30年3月期					
総貸出金残高 (A)		中小企業等貸出金残高 (B)		(B) / (A)	
貸出件数	金 額	貸出件数	金 額	貸出件数	金 額
41,459	763,116	41,271	462,166	99.54%	60.56%

(注) 中小企業等とは、資本金3億円（ただし、卸売業は1億円、小売業、飲食業、物品賃貸業等は5千万円）以下の会社又は常用する従業員が300人（ただし、卸売業、物品賃貸業等は100人、小売業、飲食業は50人）以下の企業等であります。

■消費者ローン・住宅ローン残高

(単位：百万円)

	平成29年3月期	平成30年3月期
消費者ローン	23,320	24,159
住宅ローン	209,571	219,090
合計	232,891	243,249

■貸倒引当金内訳

(単位：百万円)

	平成29年3月期	増減	平成30年3月期	増減
一般貸倒引当金	652	△ 188	857	205
個別貸倒引当金	2,205	122	2,755	550
うち非居住者向け債権分	—	—	—	—
合計	2,858	△ 66	3,613	755

■貸出金償却額

(単位：百万円)

	平成29年3月期	平成30年3月期
貸出金償却額	304	31

■リスク管理債権額

(単位：百万円)

	平成29年3月期	平成30年3月期
破綻先債権額	109	211
延滞債権額	9,749	9,290
3カ月以上延滞債権額	87	78
貸出条件緩和債権額	1,350	1,001
合計	11,297	10,582

■金融機能再生緊急措置法に基づく開示債権額

(単位：百万円)

債権の区分	平成29年3月期	平成30年3月期
破産更生債権及びこれらに準ずる債権	1,606	1,261
危険債権	8,276	8,247
要管理債権	1,438	1,080
正常債権	745,280	773,384

(注) 資産の査定は、「金融機能の再生のための緊急措置に関する法律」（平成10年法律第132号）第6条に基づき、当行の貸借対照表の社債（当該社債を有する金融機関がその元本の償還及び利息の支払の全部又は一部について保証しているものであって、当該社債の発行が金融商品取引法（昭和23年法律第25号）第2条第3項に規定する有価証券の私募によるものに限る。）、貸出金、外国為替、その他資産中の未収利息及び仮払金、支払承諾見返の各勘定に計上されるもの並びに貸借対照表に注記することとされている有価証券の貸付けを行っている場合のその有価証券（使用貸借又は賃貸借契約によるものに限る。）について債務者の財政状態及び経営成績等を基礎として区分するものであります。



有価証券

■保有有価証券残高

(単位：百万円、%)

	平成29年3月期				平成30年3月期			
	期末残高	構成比	平均残高	構成比	期末残高	構成比	平均残高	構成比
国内業務部門	165,763	99.4	153,637	99.4	144,473	100.0	151,844	99.5
国債	55,316	33.2	52,186	33.7	43,344	30.0	49,495	32.5
地方債	60,672	36.4	59,982	38.8	57,769	40.0	58,623	38.4
短期社債	—	—	—	—	—	—	—	—
社債	19,570	11.7	21,744	14.1	20,934	14.5	20,152	13.2
株式	6,266	3.8	5,708	3.7	6,118	4.2	5,697	3.7
その他	23,937	14.3	14,014	9.1	16,305	11.3	17,874	11.7
うち外国債券	—	—	—	—	—	—	—	—
うち外国株式	—	—	—	—	—	—	—	—
国際業務部門	1,035	0.6	1,000	0.6	—	—	720	0.5
国債	—	—	—	—	—	—	—	—
地方債	—	—	—	—	—	—	—	—
短期社債	—	—	—	—	—	—	—	—
社債	—	—	—	—	—	—	—	—
株式	—	—	—	—	—	—	—	—
その他	1,035	0.6	1,000	0.6	—	—	720	0.5
うち外国債券	1,035	0.6	1,000	0.6	—	—	720	0.5
うち外国株式	—	—	—	—	—	—	—	—
合計	166,798	100.0	154,637	100.0	144,473	100.0	152,564	100.0

■公共債引受額

(単位：百万円)

	平成29年3月期	平成30年3月期
国債	—	—
政府保証債	300	500
地方債・地方公共債	14,071	7,868
合計	14,371	8,368

■公共債ディーリング実績

(単位：百万円)

	平成29年3月期		平成30年3月期	
	売買高	平均残高	売買高	平均残高
商品国債	342	0	308	0
商品地方債・商品政府保証債	13	0	16	0
その他の商品有価証券	—	—	—	—
合計	355	0	324	0

■公共債窓口販売取扱高

(単位：百万円)

	平成29年3月期	平成30年3月期
国債	147	253
地方債・政府保証債	—	—
合計	147	253

■証券投資信託預かり資産残高

(単位：百万円)

	平成29年3月期	平成30年3月期
公社債投信	13	8
株式投信	33,471	33,166
合計	33,484	33,175

■有価証券の残存期間別残高

(単位：百万円)

	平成29年3月期							合計
	1年以下	1年超 3年以下	3年超 5年以下	5年超 7年以下	7年超 10年以下	10年超	期間の定め のないもの	
国債	8,112	23,148	8,353	—	—	15,702	—	55,316
地方債	10,551	9,852	23,334	9,040	7,893	—	—	60,672
短期社債	—	—	—	—	—	—	—	—
社債	2,638	6,948	5,623	2,620	1,739	—	—	19,570
株式	—	—	—	—	—	—	6,266	6,266
その他証券	1,057	2,674	5,514	—	1,191	—	14,534	24,972
うち外国債券	1,035	—	—	—	—	—	—	1,035
うち外国株式	—	—	—	—	—	—	—	—
	平成30年3月期							合計
	1年以下	1年超 3年以下	3年超 5年以下	5年超 7年以下	7年超 10年以下	10年超	期間の定め のないもの	
国債	16,610	14,372	—	—	—	12,362	—	43,344
地方債	5,462	11,228	24,198	8,490	8,389	—	—	57,769
短期社債	—	—	—	—	—	—	—	—
社債	3,397	6,671	6,834	2,619	1,412	—	—	20,934
株式	—	—	—	—	—	—	6,118	6,118
その他証券	1,581	1,262	1,605	241	100	—	11,514	16,305
うち外国債券	—	—	—	—	—	—	—	—
うち外国株式	—	—	—	—	—	—	—	—

時価情報（当事業年度（平成29年4月1日から平成30年3月31日まで）

■有価証券関係

貸借対照表の「国債」「地方債」「短期社債」「社債」「株式」「その他の証券」のほか、「商品有価証券」が含まれております。

1.売買目的有価証券（単位：百万円）	
	平成30年3月期（平成30年3月31日現在）
	当事業年度の損益に含まれた評価差額
売買目的有価証券	－

2.満期保有目的の債券（単位：百万円）				
	種類	平成30年3月期（平成30年3月31日現在）		
		貸借対照表計上額	時価	差額
時価が貸借対照表計上額を超えるもの	国債	－	－	－
	地方債	－	－	－
	短期社債	－	－	－
	社債	8,980	9,012	32
	その他	－	－	－
	外国債券	－	－	－
	小計	8,980	9,012	32
時価が貸借対照表計上額を超えないもの	国債	－	－	－
	地方債	－	－	－
	短期社債	－	－	－
	社債	2,350	2,344	△5
	その他	－	－	－
	外国債券	－	－	－
	小計	2,350	2,344	△5
合計		11,330	11,357	27

（注）時価は、当事業年度末日における市場価格等に基づいております。

3.子会社株式及び関連会社株式

時価のある子会社株式及び関連会社株式はありません。

（注）時価を把握することが極めて困難と認められる子会社株式及び関連会社株式（単位：百万円）	
	貸借対照表計上額
子会社株式	78
関連会社株式	4
合計	82

これらについては、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから、「子会社株式及び関連会社株式」には含めておりません。

4.その他有価証券（単位：百万円）				
	種類	平成30年3月期（平成30年3月31日現在）		
		貸借対照表計上額	取得原価	差額
貸借対照表計上額が取得原価を超えるもの	株式	2,725	1,445	1,280
	債券	77,290	75,232	2,057
	国債	39,641	38,018	1,622
	地方債	31,234	30,911	323
	短期社債	－	－	－
	社債	6,414	6,302	111
	その他	8,250	7,377	873
	外国債券	－	－	－
	小計	88,267	84,055	4,211
貸借対照表計上額が取得原価を超えないもの	株式	1,759	2,445	△686
	債券	33,428	33,552	△124
	国債	3,703	3,728	△24
	地方債	26,534	26,628	△94
	短期社債	－	－	－
	社債	3,190	3,195	△5
	その他	7,529	7,913	△384
	外国債券	－	－	－
	小計	42,716	43,912	△1,195
合計		130,984	127,968	3,016

（注）時価を把握することが極めて困難と認められるその他有価証券（単位：百万円）

	貸借対照表計上額
株式	1,551
その他	525
合計	2,076

これらについては、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから、上表の「その他有価証券」には含めておりません。

5.当事業年度中に売却した満期保有目的の債券
当事業年度中に売却した満期保有目的の債券はありません。

6.当事業年度中に売却したその他有価証券（単位：百万円）			
	平成30年3月期（平成29年4月1日から平成30年3月31日まで）		
	売却額	売却益の合計額	売却損の合計額
株式	551	193	－
債券	3,378	573	－
国債	3,378	573	－
地方債	－	－	－
短期社債	－	－	－
社債	－	－	－
その他	4,019	361	49
外国債券	－	－	－
合計	7,950	1,129	49

7.保有目的を変更した有価証券
当事業年度中に保有目的を変更した有価証券はありません。

8.減損処理を行った有価証券
売買目的有価証券以外の有価証券（時価を把握することが極めて困難なものを除く）のうち、当該有価証券の時価が取得原価に比べて著しく下落しており、時価が取得原価まで回復する見込みがあると認められないものについては、当該時価をもって貸借対照表計上額とするとともに、評価差額を当該事業年度の損失として処理（以下「減損処理」という。）しております。
当事業年度においては、減損処理を行っておりません。
時価が「著しく下落した」と判断するための基準は、時価のある有価証券の時価が、取得原価に比べて50%以上下落した場合には、「著しく下落した」と見做し、減損処理を実施いたします。
また、30%以上50%未満の下落に該当する場合には、回復可能性を合理的な根拠をもって判断し、減損処理することとしております。
この場合の合理的な根拠とは、個別銘柄毎に、株式の取得時点、期末日、期末日後における市場価格の推移及び市場環境の動向、最高値・最安値と購入価格との乖離状況、発行会社の業況等の推移等、時価下落の内的・外的要因を総合して勘案するものとしております。
ただし、株式の時価が過去2年間にわたり著しく下落した状態にある場合や、株式の発行会社が債務超過の状態にある場合又は2期連続で損失を計上しており、翌期もそのように予想される場合には、回復する見込みはないものとし、評価差損の減損処理を行っております。

■金銭の信託関係

1.運用目的の金銭の信託
（平成30年3月31日現在）
運用目的の金銭の信託は保有しておりません。

2.満期保有目的の金銭の信託
（平成30年3月31日現在）
満期保有目的の金銭の信託は保有しておりません。

3.その他の金銭の信託（運用目的及び満期保有目的以外）
（平成30年3月31日現在）
その他の金銭の信託は保有しておりません。

■その他有価証券評価差額金

平成30年3月期貸借対照表に計上されているその他有価証券評価差額金相当額の内訳は、次のとおりであります。

（単位：百万円）	
	平成30年3月期（平成30年3月31日現在）
評価差額	3,016
その他有価証券	3,016
その他の金銭の信託	－
（△）繰延税金負債	918
その他有価証券評価差額金（持分相当額調整前）	2,097

時価情報（前事業年度（平成28年4月1日から平成29年3月31日まで）

■有価証券関係

貸借対照表の「国債」「地方債」「短期社債」「社債」「株式」「その他の証券」のほか、「商品有価証券」が含まれております。

1.売買目的有価証券（単位：百万円）	
	平成29年3月期（平成29年3月31日現在）
	当事業年度の損益に含まれた評価差額
売買目的有価証券	－

2.満期保有目的の債券（単位：百万円）				
	種類	平成29年3月期（平成29年3月31日現在）		
		貸借対照表計上額	時価	差額
時価が貸借対照表計上額を超えるもの	国債	－	－	－
	地方債	－	－	－
	短期社債	－	－	－
	社債	8,670	8,712	42
	その他	－	－	－
	外国債券	－	－	－
	小計	8,670	8,712	42
時価が貸借対照表計上額を超えないもの	国債	－	－	－
	地方債	－	－	－
	短期社債	－	－	－
	社債	930	928	△1
	その他	－	－	－
	外国債券	－	－	－
	小計	930	928	△1
合計		9,600	9,641	41

（注）時価は、当事業年度末日における市場価格等に基づいております。

3.子会社株式及び関連会社株式

時価のある子会社株式及び関連会社株式はありません。

（注）時価を把握することが極めて困難と認められる子会社株式及び関連会社株式（単位：百万円）	
	貸借対照表計上額
子会社株式	78
関連会社株式	4
合計	82

これらについては、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから、「子会社株式及び関連会社株式」には含めておりません。

4.その他有価証券（単位：百万円）				
	種類	平成29年3月期（平成29年3月31日現在）		
		貸借対照表計上額	取得原価	差額
貸借対照表計上額が取得原価を超えるもの	株式	3,015	1,803	1,212
	債券	92,442	89,594	2,847
	国債	51,583	49,261	2,321
	地方債	34,027	33,632	394
	短期社債	－	－	－
	社債	6,831	6,700	131
	その他	13,955	13,207	748
	外国債券	1,035	1,000	35
	小計	109,413	104,605	4,807
貸借対照表計上額が取得原価を超えないもの	株式	1,694	2,445	△751
	債券	33,517	33,726	△209
	国債	3,733	3,793	△59
	地方債	26,644	26,786	△141
	短期社債	－	－	－
	社債	3,139	3,147	△8
	その他	10,674	10,893	△218
	外国債券	－	－	－
	小計	45,886	47,066	△1,179
合計		155,299	151,671	3,628

（注）時価を把握することが極めて困難と認められるその他有価証券（単位：百万円）

	貸借対照表計上額
株式	1,474
その他	341
合計	1,815

これらについては、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから、上表の「その他有価証券」には含めておりません。

5.当事業年度中に売却した満期保有目的の債券
当事業年度中に売却した満期保有目的の債券はありません。

6.当事業年度中に売却したその他有価証券（単位：百万円）			
	平成29年3月期（平成28年4月1日から平成29年3月31日まで）		
	売却額	売却益の合計額	売却損の合計額
株式	183	34	－
債券	－	－	－
国債	－	－	－
地方債	－	－	－
短期社債	－	－	－
社債	－	－	－
その他	4,481	873	－
外国債券	－	－	－
合計	4,664	907	－

7.保有目的を変更した有価証券
当事業年度中に保有目的を変更した有価証券はありません。

8.減損処理を行った有価証券
売買目的有価証券以外の有価証券（時価を把握することが極めて困難なものを除く）のうち、当該有価証券の時価が取得原価に比べて著しく下落しており、時価が取得原価まで回復する見込みがあると認められないものについては、当該時価をもって貸借対照表計上額とするとともに、評価差額を当該事業年度の損失として処理（以下、「減損処理」という。）しております。
当事業年度における減損処理額はありません。
時価が「著しく下落した」と判断するための基準は、時価のある有価証券の時価が、取得原価に比べて50%以上下落した場合には、「著しく下落した」と見做し、減損処理を実施いたします。
また、30%以上50%未満の下落に該当する場合には、回復可能性を合理的な根拠をもって判断し、減損処理することとしております。
この場合の合理的な根拠とは、個別銘柄毎に、株式の取得時点、期末日、期末日後における市場価格の推移及び市場環境の動向、最高値・最安値と購入価格との乖離状況、発行会社の業況等の推移等、時価下落の内的・外的要因を総合して勘案するものとしております。
ただし、株式の時価が過去2年間にわたり著しく下落した状態にある場合や、株式の発行会社が債務超過の状態にある場合又は2期連続で損失を計上しており、翌期もそのように予想される場合には、回復する見込みはないものとし、評価差損の減損処理を行っております。

■金銭の信託関係

1.運用目的の金銭の信託
（平成29年3月31日現在）
運用目的の金銭の信託は保有しておりません。

2.満期保有目的の金銭の信託
（平成29年3月31日現在）
満期保有目的の金銭の信託は保有しておりません。

3.その他の金銭の信託（運用目的及び満期保有目的以外）
（平成29年3月31日現在）
その他の金銭の信託は保有しておりません。

■その他有価証券評価差額金

平成29年3月期貸借対照表に計上されているその他有価証券評価差額金相当額の内訳は、次のとおりであります。

（単位：百万円）	
	平成29年3月期（平成29年3月31日現在）
評価差額	3,628
その他有価証券	3,628
その他の金銭の信託	－
（△）繰延税金負債相当額	1,105
その他有価証券評価差額金相当額	2,523



デリバティブ取引

■デリバティブ取引関係（当事業年度（平成29年4月1日から平成30年3月31日まで））

1. ヘッジ会計が適用されていないデリバティブ取引

ヘッジ会計が適用されていないデリバティブ取引について、取引の対象物の種類ごとの決算日における契約額又は契約において定められた元本相当額、時価及び評価損益並びに当該時価の算定方法は、次のとおりであります。なお、契約額等については、その金額自体がデリバティブ取引に係る市場リスクを示すものではありません。

(1) 金利関連取引（平成30年3月31日現在）

該当事項はありません。

(2) 通貨関連取引

(単位：百万円)

	種類	平成30年3月期（平成30年3月31日現在）			
		契約額等	契約額のうち1年超のもの	時価	評価損益
店頭	通貨スワップ	13,853	13,853	2	2
	為替予約				
	売建	1,010	—	8	8
	買建	977	—	△3	△3
合計		—	—	8	8

(注) 1.上記取引については時価評価を行い、評価損益を損益計算書に計上しております。

2.時価の算定

割引現在価値等により算定しております。

(3) 株式関連取引（平成30年3月31日現在）

該当事項はありません。

(4) 債券関連取引（平成30年3月31日現在）

該当事項はありません。

(5) 商品関連取引（平成30年3月31日現在）

該当事項はありません。

(6) クレジットデリバティブ取引（平成30年3月31日現在）

該当事項はありません。

2. ヘッジ会計が適用されているデリバティブ取引

ヘッジ会計が適用されているデリバティブ取引について、取引の対象物の種類ごと、ヘッジ会計の方法別の決算日における契約額又は契約において定められた元本相当額及び時価並びに当該時価の算定方法は、次のとおりであります。なお、契約額等については、その金額自体がデリバティブ取引に係る市場リスクを示すものではありません。

(1) 金利関連取引（平成30年3月31日現在）

該当事項はありません。

(2) 通貨関連取引

(単位：百万円)

ヘッジ会計の方法	種類	主なヘッジ対象	平成30年3月期（平成30年3月31日現在）		
			契約額等	契約額のうち1年超のもの	時価
原則的処理方法	為替予約	外貨建の貸出金、有価証券、預金、外国為替等	116	—	3
		合計	—	—	3

(注) 1.主として「銀行業における外貨建取引等の会計処理に関する会計上及び監査上の取扱い」（日本公認会計士協会業種別監査委員会報告第25号 平成14年7月29日）に基づき、繰延ヘッジによっております。

2.時価の算定

割引現在価値等により算定しております。

(3) 株式関連取引（平成30年3月31日現在）

該当事項はありません。

(4) 債券関連取引（平成30年3月31日現在）

該当事項はありません。

■デリバティブ取引関係（前事業年度（平成28年4月1日から平成29年3月31日まで））

1. ヘッジ会計が適用されていないデリバティブ取引

ヘッジ会計が適用されていないデリバティブ取引について、取引の対象物の種類ごとの決算日における契約額又は契約において定められた元本相当額、時価及び評価損益並びに当該時価の算定方法は、次のとおりであります。なお、契約額等については、その金額自体がデリバティブ取引に係る市場リスクを示すものではありません。

(1) 金利関連取引

(単位：百万円)

	種類	平成29年3月期（平成29年3月31日現在）			
		契約額等	契約額のうち1年超のもの	時価	評価損益
店頭	金利スワップ				
	受取固定・支払変動	50	—	0	0
	受取変動・支払固定	50	—	△0	△0
	合計	100	—	0	0

(注) 1.上記取引については時価評価を行い、評価損益を損益計算書に計上しております。

2.時価の算定

取引所取引については、東京金融取引所等における最終の価格によっております。店頭取引については、割引現在価値やオプション価格計算モデル等により算定しております。

(2) 通貨関連取引

(単位：百万円)

	種類	平成29年3月期（平成29年3月31日現在）			
		契約額等	契約額のうち1年超のもの	時価	評価損益
店頭	通貨スワップ	11,583	11,583	4	4
	為替予約				
	売建	189	—	1	1
	買建	116	—	1	1
合計		—	—	7	7

(注) 1.上記取引については時価評価を行い、評価損益を損益計算書に計上しております。

2.時価の算定

割引現在価値等により算定しております。

(3) 株式関連取引（平成29年3月31日現在）

該当事項はありません。

(4) 債券関連取引（平成29年3月31日現在）

該当事項はありません。

(5) 商品関連取引（平成29年3月31日現在）

該当事項はありません。

(6) クレジットデリバティブ取引（平成29年3月31日現在）

該当事項はありません。

2. ヘッジ会計が適用されているデリバティブ取引

ヘッジ会計が適用されているデリバティブ取引について、取引の対象物の種類ごと、ヘッジ会計の方法別の決算日における契約額又は契約において定められた元本相当額及び時価並びに当該時価の算定方法は、次のとおりであります。なお、契約額等については、その金額自体がデリバティブ取引に係る市場リスクを示すものではありません。

(1) 金利関連取引

(単位：百万円)

ヘッジ会計の方法	種類	主なヘッジ対象	平成29年3月期（平成29年3月31日現在）		
			契約額等	契約額のうち1年超のもの	時価
原則的処理方法	金利スワップ	受取固定・支払変動	—	—	—
		受取変動・支払固定	—	—	—
		合計	—	—	—
金利スワップの特例処理	金利スワップ	受取固定・支払変動	—	—	—
		受取変動・支払固定	3,200	—	△44
		合計	—	—	△44

(注) 1.主として「銀行業における金融商品会計基準適用に関する会計上及び監査上の取扱い」（日本公認会計士協会業種別監査委員会報告第24号 平成14年2月13日）に基づき、繰延ヘッジによっております。

2.時価の算定

取引所取引については、東京金融取引所等における最終の価格によっております。店頭取引については、割引現在価値やオプション価格計算モデル等により算定しております。

(2) 通貨関連取引

(単位：百万円)

ヘッジ会計の方法	種類	主なヘッジ対象	平成29年3月期（平成29年3月31日現在）		
			契約額等	契約額のうち1年超のもの	時価
原則的処理方法	為替予約	外貨建の貸出金、有価証券、預金、外国為替等	118	—	2
		合計	—	—	2

(注) 1.主として「銀行業における外貨建取引等の会計処理に関する会計上及び監査上の取扱い」（日本公認会計士協会業種別監査委員会報告第25号 平成14年7月29日）に基づき、繰延ヘッジによっております。

2.時価の算定

割引現在価値等により算定しております。

(3) 株式関連取引（平成29年3月31日現在）

該当事項はありません。

(4) 債券関連取引（平成29年3月31日現在）

該当事項はありません。



国際・為替業務／資本・株式

国際・為替業務

■内国為替の状況

(単位：千口、百万円)

		平成29年3月期		平成30年3月期	
		口数	金額	口数	金額
送金為替	各地へ向けた分	3,086	2,115,953	3,077	2,136,570
	各地より受けた分	3,370	2,166,098	3,377	2,170,811
代金取立	各地へ向けた分	18	30,071	20	27,196
	各地より受けた分	29	40,605	22	35,622

■外国為替の状況

(単位：百万米ドル)

		平成29年3月期	平成30年3月期
仕向為替	売渡為替	54	115
	買入為替	3	4
被仕向為替	支払為替	97	195
	取立為替	7	11
合計		162	328

■外貨建資産残高

(単位：百万米ドル)

	平成29年3月期	平成30年3月期
外貨建資産残高	5	5

資本・株式

■資本の推移

(単位：百万円)



■所有者別状況

(平成30年3月31日現在)

区分	株 式 の 状 況 (1単元の株式数100株)							計	単元未満株式の状況 (株)
	政府及び地方公共団体	金融機関	金融商品取引業者	その他の法人	外国法人等		個人その他		
株主数 (人)	1	33	23	543	72	2	3,245	3,919	—
所有株式数 (単元)	2	26,928	906	33,184	4,913	2	29,535	95,470	72,938
所有株式数の割合 (%)	0.00	28.20	0.95	34.76	5.15	0.00	30.94	100.00	—

(注) 自己株式255,119株は「個人その他」に2,551単元、「単元未満株式の状況」に19株含まれております。

■大株主一覧

(平成30年3月31日現在)

氏名又は名称	住所	所有株式数	発行済株式(自己株式を除く。)の総数に対する所有株式数の割合
日本トラスティ・サービス信託銀行株式会社(信託口)	東京都中央区晴海1丁目8番11号	392 千株	4.19 %
明治安田生命保険相互会社	東京都千代田区丸の内2丁目1番1号	342	3.65
損害保険ジャパン日本興亜株式会社	東京都新宿区西新宿1丁目26番1号	305	3.25
鳥取銀行従業員持株会	鳥取県鳥取市永楽温泉町171番地	258	2.75
日本トラスティ・サービス信託銀行株式会社(信託口4)	東京都中央区晴海1丁目8番11号	231	2.47
中国電力株式会社	広島県広島市中区小町4番33号	229	2.44
株式会社三菱東京UFJ銀行	東京都千代田区丸の内2丁目7番1号	222	2.37
日本マスタートラスト信託銀行株式会社(信託口)	東京都港区浜松町2丁目11番3号	182	1.95
三井生命保険株式会社	東京都千代田区大手町2丁目1番1号	168	1.79
日本トラスティ・サービス信託銀行株式会社(信託口5)	東京都中央区晴海1丁目8番11号	120	1.28
計	—	2,453	26.19

(注) 1.上記の信託銀行所有株式数のうち、当該銀行の信託業務に係る株式数は、次のとおりであります。

日本トラスティ・サービス信託銀行株式会社(信託口) 392千株
日本トラスティ・サービス信託銀行株式会社(信託口4) 231千株
日本マスタートラスト信託銀行株式会社(信託口) 182千株
日本トラスティ・サービス信託銀行株式会社(信託口5) 120千株

2.上記のほか、自己株式が255千株あります。

3.従来は大株主の状況について信託財産等を合算(名寄せ)して表示しておりましたが、当事業年度より株主名簿の記載どおりに表示しております。

前事業年度末現在と比較した順位の変動の主な要因は、当該表示方法の変更によるものであります。

4.株式会社三菱UFJフィナンシャル・グループから、株式会社三菱東京UFJ銀行他2社を共同保有者として、平成29年6月12日現在の保有株式数を記載した同年6月19日付大量保有報告書(変更報告書)が開東財務局長に提出されておりますが、当行として平成30年3月31日現在における実質保有株式数が確認できておりませんので、株主名簿上の所有株式数を上記大株主の状況に記載しております。

当該報告書の内容は以下のとおりであります。

氏名又は名称	住所	所有株式数	発行済株式総数に対する所有株式数の割合
株式会社三菱東京UFJ銀行	東京都千代田区丸の内2丁目7番1号	249 千株	2.59 %
三菱UFJ信託銀行株式会社	東京都千代田区丸の内1丁目4番5号	152	1.59
三菱UFJ国際投信株式会社	東京都千代田区有楽町1丁目12番1号	16	0.17
計	—	418	4.35

5.株式会社三菱東京UFJ銀行は、平成30年4月1日より、株式会社三菱UFJ銀行と行名変更されております。



自己資本の充実の状況等について

平成26年2月18日金融庁告示第7号「銀行法施行規則第19条の2第1項第5号二等の規定に基づき、自己資本の充実の状況等について金融庁長官が別に定める事項」に基づく開示事項を開示しております。

■自己資本の構成に関する開示事項

自己資本比率は、銀行法第14条の2の規定に基づき、銀行がその保有する資産等に照らし自己資本の充実の状況が適当であるかどうかを判断するための基準（平成18年金融庁告示第19号。以下「告示」という。）に定められた算式に基づき、連結ベースと単体ベースの双方について算出しております。なお、当行は、国内基準を適用のうえ、信用リスク・アセットの算出においては標準的手法を採用しております。

(連結)					(単位：百万円、%)	
項 目		平成28年度末		平成29年度末		
			経過措置による 不算入額		経過措置による 不算入額	
コア資本に係る基礎項目（1）						
普通株式又は強制転換条項付優先株式に係る株主資本の額		43,792		44,330		
うち、資本金及び資本剰余金の額		15,514		15,514		
うち、利益剰余金の額		29,231		29,770		
うち、自己株式の額（△）		672		673		
うち、社外流出予定額（△）		280		280		
うち、上記以外に該当するものの額		－		－		
コア資本に算入されるその他の包括利益累計額		1,247		1,572		
うち、為替換算調整勘定		－		－		
うち、退職給付に係るものの額		1,247		1,572		
普通株式又は強制転換条項付優先株式に係る新株予約権の額		－		－		
コア資本に係る調整後非支配株主持分の額		－		－		
コア資本に係る基礎項目の額に算入される引当金の合計額		675		878		
うち、一般貸倒引当金コア資本算入額		675		878		
うち、適格引当金コア資本算入額		－		－		
適格旧非累積的永久優先株の額のうち、コア資本に係る基礎項目の額に含まれる額		－		－		
適格旧資本調達手段の額のうち、コア資本に係る基礎項目の額に含まれる額		3,000		3,000		
公的機関による資本の増強に関する措置を通じて発行された資本調達手段の額のうち、コア資本に係る基礎項目の額に含まれる額		－		－		
土地再評価額と再評価直前の帳簿価格の差額の四十五パーセントに相当する額のうち、コア資本に係る基礎項目の額に含まれる額		532		457		
非支配株主持分のうち、経過措置によりコア資本に係る基礎項目の額に含まれる額		57		51		
コア資本に係る基礎項目の額		(イ) 49,305		50,290		
コア資本に係る調整項目（2）						
無形固定資産（モーゲージ・サービシング・ライセンスに係るものを除く。）の額の合計額		257	171	397	99	
うち、のれんに係るもの（のれん相当差額を含む。）の額		－	－	－	－	
うち、のれん及びモーゲージ・サービシング・ライセンスに係るもの以外の額		257	171	397	99	
繰延税金資産（一時差異に係るものを除く。）の額		－	－	－	－	
適格引当金不足額		－	－	－	－	
証券化取引に伴い増加した自己資本に相当する額		83	－	－	－	
負債の時価評価により生じた時価評価差額であって自己資本に算入される額		－	－	－	－	
退職給付に係る資産の額		2,605	1,736	3,719	929	
自己保有普通株式等（純資産の部に計上されるものを除く。）の額		－	－	－	－	
意図的に保有している他の金融機関等の対象資本調達手段の額		－	－	－	－	
少数出資金融機関等の対象普通株式等の額		－	－	－	－	
特定項目に係る十パーセント基準超過額		－	－	－	－	
うち、その他金融機関等の対象普通株式等に該当するものに関連するものの額		－	－	－	－	
うち、モーゲージ・サービシング・ライセンスに係る無形固定資産に関連するものの額		－	－	－	－	
うち、繰延税金資産（一時差異に係るものに限る。）に関連するものの額		－	－	－	－	
特定項目に係る十五パーセント基準超過額		－	－	－	－	
うち、その他金融機関等の対象普通株式等に該当するものに関連するものの額		－	－	－	－	
うち、モーゲージ・サービシング・ライセンスに係る無形固定資産に関連するものの額		－	－	－	－	
うち、繰延税金資産（一時差異に係るものに限る。）に関連するものの額		－	－	－	－	
コア資本に係る調整項目の額		(ロ) 2,945		4,116		
自己資本						
自己資本の額（(イ) － (ロ)）		(ハ) 46,360		46,173		
リスク・アセット等（3）						
信用リスク・アセットの額の合計額		459,037		467,888		
うち、経過措置によりリスク・アセットの額に算入される額の合計額		△ 96		△ 975		
うち、無形固定資産（のれん及びモーゲージ・サービシング・ライセンスに係るものを除く。）		171		99		
うち、繰延税金資産		－		－		
うち、退職給付に係る資産		1,736		929		
うち、他の金融機関等向けエクスポージャー		△ 2,004		△ 2,004		
うち、上記以外に該当するものの額		－		－		
マーケット・リスク相当額の合計額を八パーセントで除して得た額		－		－		

(単位：百万円、%)				
項 目	平成28年度末		平成29年度末	
		経過措置による 不算入額		経過措置による 不算入額
オペレーショナル・リスク相当額の合計額を八パーセントで除して得た額	24,671		23,085	
信用リスク・アセット調整額	－		－	
オペレーショナル・リスク相当額調整額	－		－	
リスク・アセット等の額の合計額	(ニ) 483,708		490,974	
連結自己資本比率				
連結自己資本比率（(ハ) / (ニ)）	9.58		9.40	



自己資本の充実の状況等について

(単体)		(単位：百万円、％)			
項 目		平成28年度末		平成29年度末	
			経過措置による 不算入額		経過措置による 不算入額
コア資本に係る基礎項目 (1)					
普通株式又は強制転換条項付優先株式に係る株主資本の額		43,586		44,113	
うち、資本金及び資本剰余金の額		15,514		15,514	
うち、利益剰余金の額		29,025		29,553	
うち、自己株式の額 (△)		671		673	
うち、社外流出予定額 (△)		280		280	
うち、上記以外に該当するものの額		－		－	
普通株式又は強制転換条項付優先株式に係る新株予約権の額		－		－	
コア資本に係る基礎項目の額に算入される引当金の合計額		652		857	
うち、一般貸倒引当金コア資本算入額		652		857	
うち、適格引当金コア資本算入額		－		－	
適格旧非累積的永久優先株の額のうち、コア資本に係る基礎項目の額に含まれる額		－		－	
適格旧資本調達手段の額のうち、コア資本に係る基礎項目の額に含まれる額		3,000		3,000	
公的機関による資本の増強に関する措置を通じて発行された資本調達手段の額のうち、コア資本に係る基礎項目の額に含まれる額		－		－	
土地再評価額と再評価直前の帳簿価格の差額の四十五パーセントに相当する額のうち、コア資本に係る基礎項目の額に含まれる額		532		457	
コア資本に係る基礎項目の額 (イ)		47,771		48,429	
コア資本に係る調整項目 (2)					
無形固定資産（モーゲージ・サービシング・ライツに係るものを除く。）の額の合計額		257	171	396	99
うち、のれんに係るものの額		－	－	－	－
うち、のれん及びモーゲージ・サービシング・ライツに係るもの以外の額		257	171	396	99
繰延税金資産（一時差異に係るものを除く。）の額		－	－	－	－
適格引当金不足額		－	－	－	－
証券化取引に伴い増加した自己資本に相当する額		83	－	－	－
負債の時価評価により生じた時価評価差額であって自己資本に算入される額		－	－	－	－
前払年金費用の額		1,302	868	2,085	521
自己保有普通株式等（純資産の部に計上されるものを除く。）の額		－	－	－	－
意図的に保有している他の金融機関等の対象資本調達手段の額		－	－	－	－
少数出資金融機関等の対象普通株式等の額		－	－	－	－
特定項目に係る十パーセント基準超過額		－	－	－	－
うち、その他金融機関等の対象普通株式等に該当するものに関連するものの額		－	－	－	－
うち、モーゲージ・サービシング・ライツに係る無形固定資産に関連するものの額		－	－	－	－
うち、繰延税金資産（一時差異に係るものに限る。）に関連するものの額		－	－	－	－
特定項目に係る十五パーセント基準超過額		－	－	－	－
うち、その他金融機関等の対象普通株式等に該当するものに関連するものの額		－	－	－	－
うち、モーゲージ・サービシング・ライツに係る無形固定資産に関連するものの額		－	－	－	－
うち、繰延税金資産（一時差異に係るものに限る。）に関連するものの額		－	－	－	－
コア資本に係る調整項目の額 (ロ)		1,642		2,481	
自己資本					
自己資本の額 ((イ) － (ロ)) (ハ)		46,129		45,947	
リスク・アセット等 (3)					
信用リスク・アセットの額の合計額		456,711		465,720	
うち、経過措置によりリスク・アセットの額に算入される額の合計額		△ 965		△ 1,384	
うち、無形固定資産（のれん及びモーゲージ・サービシング・ライツに係るものを除く。）		171		99	
うち、繰延税金資産		－		－	
うち、前払年金費用		868		521	
うち、他の金融機関等向けエクスポージャー		△ 2,004		△ 2,004	
うち、上記以外に該当するものの額		－		－	
マーケット・リスク相当額の合計額を八パーセントで除して得た額		－		－	
オペレーショナル・リスク相当額の合計額を八パーセントで除して得た額		24,371		22,770	
信用リスク・アセット調整額		－		－	
オペレーショナル・リスク相当額調整額		－		－	
リスク・アセット等の額の合計額 (ニ)		481,083		488,490	
自己資本比率					
自己資本比率 ((ハ) / (ニ))		9.58		9.40	

■定性的な開示事項

1.連結の範囲に関する事項

(1) 自己資本比率告示第二十六条の規定により連結自己資本比率を算出する対象となる会社の集団（以下「連結グループ」という。）に属する会社と連結財務諸表の用語、様式及び作成方法に関する規則（昭和五十一年大蔵省令第二十八号。）に基づき連結の範囲（以下「会計連結範囲」という。）に含まれる会社との相違点及び当該相違点の生じた原因

連結グループに属する会社と会計連結範囲に含まれる会社に相違点はありません。

(2) 連結グループのうち、連結子会社の数並びに主要な連結子会社の名称及び主要な業務の内容

名 称	主な業務の内容
株式会社とりぎんカードサービス	クレジットカード業務

(3) 自己資本比率告示第三十二条が適用される金融業務を営む関連法人等の数並びに当該金融業務を営む関連法人等の名称、貸借対照表の総資産の額及び純資産の額並びに主要な業務の内容

該当ありません。

(4) 連結グループに属する会社であって会計連結範囲に含まれないもの及び連結グループに属しない会社であって会計連結範囲に含まれるものの名称、貸借対照表の総資産の額及び純資産の額並びに主要な業務の内容

該当ありません。

(5) 連結グループ内の資金及び自己資本の移動に係る制限等の概要

連結グループ内の資金及び自己資本の移動に係る制限等は定められておりません。
なお、連結子会社1社において、債務超過はなく、自己資本は充実しております。また、連結グループ内において自己資本にかかる支援は行っておりません。

2.自己資本調達手段の概要

資本調達手段	コア資本に係る基礎項目の額に算入された額	概要
普通株式	15,514百万円	完全議決権株式。
期限付劣後債務	3,000百万円	
劣後特約付借入金	3,000百万円	弁済期限平成36年3月29日。期間10年（期日一括返済）。但し、5年目以降に監督当局の承認を条件に期限前返済が可能。

(注) 1.資本調達手段の発行者は全て鳥取銀行です。
2.普通株式における、コア資本に係る基礎項目の額に算入された額については、資本金及び資本剰余金の額を記載しております。

3.連結グループ及び単体の自己資本の充実度に関する評価方法の概要

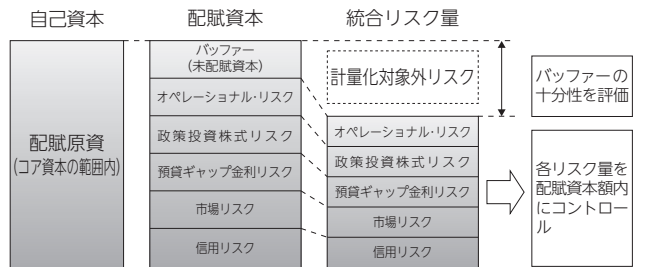
(自己資本比率)
連結自己資本比率は9.40％、単体自己資本比率は9.40％と国内基準で必要とされる4％を大きく上回っております。

(統合リスク管理)
当行では、自己資本の充実度を評価する手法として、コア資本と統合リスク量の対比によるリスク管理を行っております。

具体的には、リスク管理部署が収益目標の達成に必要なリスク量を推計し、信用リスク、市場リスク、預貸ギャップ金利リスク、政策投資株式リスク、オペレーショナル・リスク等の各リスク種類別に、コア資本の範囲内で資本配賦を行い、各リスク量が配賦資本額の範囲内に収まっていることを月次でモニタリングしております。また、定期的にストレステストを実施し、自己資本の毀損の程度を分析しているほか、計量モデルの限界等により計量化対象外としているリスク等を踏まえ、バッファ（コア資本から資本配賦合計を控除した未配賦資本）が十分であるかという観点も含め、自己資本の充実度を評価しております。

(金利リスク及び信用集中リスク)
早期警戒制度の枠組みにおける「金利リスク」量及び「信用集中リスク」量の水準をモニタリングしております。

<コア資本と統合リスク量の対比の概要>





自己資本の充実の状況等について

4.信用リスクに関する事項

(1)リスク管理の方針及び手続の概要 (信用リスクとは)

信用リスクとは、信用供与先の財務状況悪化等により、貸出金の資産（オフ・バランス資産を含む）の価値が減少ないしは消失し、当行が損失を被るリスクをいいます。

うち、与信集中リスクとは、供与先のデフォルトが供与先の個別事情のみの要因で発生すると想定した場合に、大口与信先（又は、その関係会社を含むグループ全体）への与信集中等に起因するリスクをいいます。

また、業種集中リスクとは、業種・地域等への与信集中等に起因するリスクをいいます。

(リスク管理の基本方針)

当行では、信用リスク管理にあたっては、信用リスク管理の重要性を十分認識した上で、信用リスクについて適切な管理体制を構築し、「信用格付」「自己査定」などを通じ、信用リスクを客観的かつ定量的に把握するほか、信用リスク定量化等により各種リスク分析を行った上で、特定の先への与信集中、業種の偏り等、過大な与信リスクを回避するとともに、収益とリスクのバランスがとれた与信業務の遂行を図ることを基本方針としております。

(リスク管理の手続の概要)

当行では、「信用リスク管理規定」や「クレジットポリシー」を整備した上で、適切な信用リスク管理体制・組織を構築するため、リスク管理統括部署を経営管理部、信用リスク管理部署を審査部、運営部署を営業部・市場金融部とし、さらに与信監査部署として監査部資産監査室を設置し、それぞれが独立性を維持し、営業推進部門の影響を受けない体制としております。

信用リスク管理の基本として信用格付を実施し、資産の質的管理を行うとともに、個社別の融資方針を明確化し、審査管理の充実・厳正化に努めているほか、適切な償却・引当を行うため自己査定を実施しております。

信用リスク量については、VaRで定量化し、統合リスク管理において信用リスク部分に配賦されたリスク資本配賦額の範囲内でカバーされるようにポートフォリオ管理を行い、資産の適正配分による信用リスク資本の極小化、及び収益の極大化を目指しております。

信用リスク管理部署は信用リスクの管理状況について、定期的又は必要に応じて随時、リスク管理統括部署、ALM委員会、信用リスク管理委員会、経営会議等に報告しております。

(貸倒引当金の計上基準)

当行の貸倒引当金は、予め定めている償却・引当基準に則り、次のとおり計上しております。破産、特別清算等、法的に経営破綻の事実が発生している債務者（以下「破綻先」という。）に係る債権及びそれと同等の状況にある債務者（以下「実質破綻先」という。）に係る債権については、以下のなお書きに記載されている直接減額後の帳簿価額から、担保の処分可能見込額及び保証による回収可能見込額を控除し、その残額を計上しております。

また、現在は経営破綻の状況にないが、今後経営破綻に陥る可能性が大きいと認められる債務者に係る債権については、債権額から、担保の処分可能見込額及び保証による回収可能見込額を控除し、その残額のうち、債務者の支払能力を総合的に判断し必要と認める額を計上しております。

上記以外の債権については、過去の一定期間における貸倒実績から算出した貸倒実績率等に基づき計上しております。

すべての債権は、資産の自己査定基準に基づき、営業関連部署が資産査定を実施し、当該部署から独立した資産監査部署が査定結果を監査しており、その査定結果に基づいて上記の引当を行っております。

なお、破綻先及び実質破綻先に対する担保・保証付債権等については、債権額から担保の評価額及び保証による回収が可能と認められる額を控除した残額を取立不能見込額として債権額から直接減額しております。

連結子会社の貸倒引当金は、一般債権については過去の貸倒実績率等を勘案して必要と認めた額を、貸倒懸念債権等特定の債権については、個別に回収可能性を勘案し、回収不能見込額をそれぞれ引き当てております。

(連結グループにおけるリスク管理の方針及び手続の概要)

当行のリスク管理方針及び手続に準じ取扱いを行っております。

(2)標準的手法が適用されるポートフォリオについて

当行及び連結グループでは、リスク・ウェイトの判定においては、内部管理との整合を考慮し、また、特定の格付機関に偏らず、格付の客観性を高めるためにも複数の格付機関等を利用することが適切との判断に基づき、次の適格格付機関を採用しております。

- ・株式会社格付投資情報センター（R&I）
- ・株式会社日本格付研究所（JCR）
- ・ムーディーズ・インベスターズ・サービス・インク（Moody's）
- ・S&Pグローバル・レーティング（S&P）
- ・フィッチレーティングスリミテッド（Fitch）

当行及び連結グループでは、信用リスクに関する全ての種類のエクスポージャーについて、5つの適格格付機関を同様に使用し、リスク・ウェイトを判定しております。

5.信用リスク削減手法に関するリスク管理の方針及び手続の概要

(1)信用リスク削減手法

信用リスク削減手法とは、当行が抱える信用リスクを軽減するための措置であり、担保（当行預金、有価証券、商業手形、不動産、売掛債権等）、保証、貸出金と預金との相殺が該当します。

当行では、自己資本比率の算出において、「信用リスク削減手法」として「包括的手法」を適用しており、担保（当行預金、有価証券）、保証、貸出金と預金の相殺が該当する信用リスク削減手法であります。

(2)方針及び手続

当行は、担保・保証に過度に依存しない融資の推進を行っておりますが、信用リスクの削減のため担保、保証等をいただくことがあります。担保、保証、貸出金と預金の相殺については、当行が定める諸規定に則り評価、管理を行っております。

自己資本比率算出上のエクスポージャーの信用リスク削減手法として有効に認められる適格金融資産担保は、当行預金及び有価証券が該当します。また、保証については政府関係機関の保証や地方公共団体の保証のほか、民間保証会社の保証が主体となり信用度の評価については、適格格付機関の付与した格付により判定しております。貸出金と自行預金の相殺にあたっては、債務者の担保（総合口座を含む）登録のない定期預金を対象としております。

(3)信用リスク削減手法の適用に伴う信用リスクの集中

特定の信用リスク削減手法に偏ることなく、信用リスクは分散されております。

(4)連結グループにおけるリスク管理の方針及び手続の概要

連結子会社が保有する信用リスクにおいては、自己資本比率算出上の信用リスク削減手法を適用しておりません。

6.派生商品取引及び長期決済期間取引の取引相手のリスクに関するリスク管理の方針及び手続の概要

(リスク管理の方針及び手続)

対顧客向けの派生商品取引の取組にあたっては、個別に取引内容を確認のうえと信相当額を算定し、取引先の信用格付等に基づく総合的な判断により、取組の可否を判定しております。また、派生商品取引取組後も定期的に取引相手の信用格付を見直すこと等によりモニタリングしていく態勢としております。

対市場向けの派生商品取引の取組にあたっては、カウンターパーティーの外部格付等の指標に基づき、個別に信用極度額を設定し、取り組む方針としております。また、派生商品取引取組後も定期的に外部格付の状況等を確認し、与信管理を行う態勢としております。長期決済期間取引にあたっては、決済履行の可能性等について個別に判断しております。

(リスク資本の割当方法に関する方針)

派生商品取引にかかる信用リスク及び金利変動に伴う損益の影響額等は、オン・バランス取引と一体で管理を行い、当該リスクに対して資本配賦を行っております。

(引当金の算定に関する方針)

当行では派生商品取引に係る保全や引当の算定は行っておりません。**(自行の信用力の悪化により担保を追加的に提供することが必要となる場合の影響度に関する説明)**

万一、当行の信用力低下を理由にカウンターパーティーに対し担保を追加的に提供することが必要となった場合においても、当行は国債などの担保提供可能な資産を有しており、リスク・アセット増加等の影響も軽微であります。

(連結グループにおけるリスク管理の方針及び手続の概要)

連結子会社等では派生商品取引を取扱っており管理方針を定めておりません。

7.証券化エクスポージャーに関する事項

(1)リスク管理の方針及びリスク特性の概要 (取引の内容)

当行は、中小企業の皆さまの円滑で多様な資金調達に応じるため、オリジネーターとして平成30年3月期に(株)日本政策金融公庫が組成した「シンセティック型CLO」に参加し、当行の複数の事業者向け貸出債権（原債権）を証券化しております。

なお、当行は投資家として証券化商品を保有しておりません。また、連結子会社等では証券化取引を取扱っておりません。

(取引に対する取組方針)

当行は、オリジネーター及びサービサーとして新規の証券化又は再証券化の予定はございません。

また、投資家としての証券化商品への投資予定もございません。

(取引に係るリスクの内容及び管理体制)

証券化した事業者向け貸出債権に関しましては、他の貸出金等と同様に与信管理を適切に行うことで個別債務者の信用リスクを管理しております。

(2)自己資本比率告示第二百四十九条第四項第三号から第六号までに規定する体制の整備及びその運用状況の概要

当行は、証券化した事業者向け貸出債権に関しましては、他の貸出金等と同様に与信管理を適切に行うことで個別債務者の信用リスクを管理する態勢としております。

また、当行は投資家として証券化商品を保有しておりませんが、包括的なリスク特性やパフォーマンス等に係る情報を適時に把握するための態勢を整備しております。

(3)信用リスク削減手法として証券化取引を用いる場合の方針

当行では信用リスク削減手法として証券化取引を用いておりません。

(4)証券化エクスポージャーの信用リスク・アセットの額の算出に使用する方式の名称

当行では、証券化エクスポージャーの信用リスク・アセット額の算出には「外部格付準拠方式」を使用しております。

(5)証券化エクスポージャーのマーケット・リスク相当額の算出に使用する方式の名称

当行では、証券化エクスポージャーのマーケット・リスク相当額を算出しておりません。

(6)銀行が証券化目的導管体を用いて第三者の資産に係る証券化取引を行った場合には、当該証券化目的導管体の種類及び当該銀行が当該証券化取引に係る証券化エクスポージャーを保有しているかどうかの別

該当ありません。

(7)銀行の子法人等（連結子法人等を除く。）及び関連法人等のうち、当該銀行が行った証券化取引（銀行が証券化目的導管体を用いて行った証券化取引を含む。）に係る証券化エクスポージャーを保有しているものの名称

該当ありません。

(8)証券化取引に関する会計方針

会計上の処理につきましては、日本公認会計士協会の「金融商品会計に関する実務指針」に従った適正な処理を行っております。

(9)証券化エクスポージャーの種類ごとのリスク・ウェイトの判定に使用する適格格付機関の名称

当行では、全ての種類のエクスポージャーについて、次の適格格付機関を同様に使用しリスク・ウェイトを判定しております。

- ・株式会社格付投資情報センター（R&I）
- ・株式会社日本格付研究所（JCR）
- ・ムーディーズ・インベスターズ・サービス・インク（Moody's）
- ・S&Pグローバル・レーティング（S&P）
- ・フィッチレーティングスリミテッド（Fitch）

(10)内部評価方式を用いている場合には、その概要

該当ありません。

(11)定量的な情報に重要な変更が生じた場合には、その内容

該当ありません。

8.オペレーショナル・リスクに関する事項

(1)リスク管理の方針及び手続の概要 (リスク管理の基本方針)

オペレーショナル・リスクとは、業務の過程、役職員の活動若しくはシステムが不適切であること、又は外生的な事象により当行が損失を被るリスクをいいます。

当行では、業務運営において管理すべきリスク等を定義した「リスク管理統括規定」の下、「オペレーショナル・リスク管理規定」を制定し、オペレーショナル・リスク管理の基本方針を次のとおり定めております。

- ・オペレーショナル・リスクの顕在化が当行の経営及び業務遂行に多大な影響を及ぼし得ることを認識し、当行の信頼性・健全性を維持・発展させていくため、業務の適切な運営基盤を構築し、オペレーショナル・リスクを極小化等適切に管理する。
- ・緊急時となった場合の業務の継続、早急な復旧を図るため、適切な業務継続計画の立案、コンティンジェンシープランの見直しと準備・訓練による被害対策を継続的に進める。

当行では、オペレーショナル・リスクを、①事務リスク、②システムリスク、③情報資産リスク、④人的リスク、⑤有形資産リスク、⑥レピュテーションリスク、⑦法務リスク、⑧その他のオペレーショナル・リスクに分類して管理しております。

(リスク管理の手続の概要)

オペレーショナル・リスクの管理にあたっては、「リスク管理統括規定」及び「オペレーショナル・リスク管理規定」に基づき総合的なリスク管理統括を経営管理部リスク管理統括が行うとともに、各リスク管理部署が、専門的な立場からそれぞれのリスク管理の状況及び諸施策・課題を的確に把握し、管理しております。また、経営管理部リスク管理統括は、各種リスク管理状況をオペレーショナル・リスク管理委員会へ報告し、オペレーショナル・リスク管理委員会は、リスクの極小化等適切な管理を行うための施策等を協議・検討・策定し、経営会議に付議又は報告する体制としております。

なお、連結子会社のオペレーショナル・リスクについては、所管部署との連携を図りながらリスクの適切な管理態勢の強化に努めており

ます。

(2)オペレーショナル・リスク相当額の算出に使用する手法の名称

当行及び連結グループでは、自己資本比率規制上のオペレーショナル・リスク相当額の算出にあたっては、「基礎的手法」を採用しております。

（注）「基礎的手法」とは、自己資本比率算出において、オペレーショナル・リスク相当額を算出する一手法であり、1年間の粗利益の15%の直近3年間の平均値をオペレーショナル・リスク相当額とするものです。

9.出資等又は株式等エクスポージャーに関するリスク管理の方針及び手続の概要

当行では、「マーケットリスクについての磐石な管理体制を構築し、リスクを総合的に把握し適切にコントロールしながら安定的な収益を確保できる運営に取り組む」という市場リスクの管理方針に則り、株式等のリスク管理を行っております。

投資に際しては、先行きの市場環境の見通しと、相場変動リスク及び運用対象間の相関関係等を検討したうえで、総合的な判断を行っております。

株式等の価格変動リスクは、VaR（バリュー・アット・リスク）による把握を行っており、信頼水準は99%、保有期間は6ヶ月として計測しております。

株式等の評価については、子会社株式及び関連会社株式については移動平均法による原価法、その他有価証券のうち時価のあるものについては決算日の市場価格等に基づく時価法（売却原価は移動平均法により算定）、時価を把握することが極めて困難と認められるものについては移動平均法による原価法により行っております。なお、その他有価証券の評価差額については、全部純資産直入法により処理しております。

株式等について、会計方針等を変更した場合は財務諸表等規則第八条の三に基づき、変更の理由や影響額について財務諸表の注記に記載しております。

なお、連結グループにつきましては、当行以外に該当ありません。

10.金利リスクに関する事項

(1)リスク管理の方針及び手続の概要

金利リスクとは、金利変動に伴い損失を被るリスクで、資産と負債の金利又は期間のミスマッチが存在している中で金利が変動することにより、利益が低下ないし損失を被るリスクをいいます。

当行では、ALM（Asset Liability Management）の一環として、金利リスクのコントロールを実施しております。

リスク管理部署は半期毎に、収益目標の達成に必要なリスク量を推計し、リスクをカバーできるリスク資本額をALM委員会に申請し、ALM委員会での協議を経て取締役会での決議後にリスク管理部署へリスク資本配賦を行います。

また、リスク管理部署は月次で金利リスク量を計測・モニタリングするとともに、その結果をALM委員会や取締役会に報告することとしております。

なお、連結グループにつきましては、当行以外に該当ありません。

(2)銀行が内部管理上使用した金利リスクの算定手法の概要

銀行勘定の金利リスクについて、金利ショックは保有期間6ヶ月、最低5年の計測期間で計測される金利変動の1パーセンタイル値と99パーセンタイル値によって計算される経済価値の低下額としております。

計測手法については、預貸その他はラダー方式、有価証券はGPS方式としております。

コア預金は、要求払預金のうち①過去5年の最低残高、②過去5年の最大年間流出量を現残高から差し引いた残高、③現残高の50%相当額のうち最小の額によるものとし、金利満期を平均2.5年の定期預金として計算しております。

なお、貸出金、預金等の期限前返済（解約）はないものとして計算しております。



自己資本の充実の状況等について

■定量的な開示事項

1.その他金融機関等（自己資本比率告示第二十九条第六項第一号に規定するその他金融機関等をいう。）であって銀行の子法人等であるもののうち、規制上の所要自己資本を下回った会社の名称と所要自己資本を下回った額の総額

(連結)
(平成28年度末) 当行の非連結対象子会社において、自己資本額の規制を受ける会社はありません。
(平成29年度末) 当行の非連結対象子会社において、自己資本額の規制を受ける会社はありません。

2.自己資本の充実度に関する事項

(1)信用リスクに対する所要自己資本の額及びポートフォリオごとの額

(連結) (単位：百万円)

項 目	平成28年度末		平成29年度末	
	リスク・アセットの額	所要自己資本の額	リスク・アセットの額	所要自己資本の額
資産（オン・バランス）項目				
1. 現金	—	—	—	—
2. 我が国の中央政府及び中央銀行向け	—	—	—	—
3. 外国の中央政府及び中央銀行向け	—	—	—	—
4. 国際決済銀行等向け	—	—	—	—
5. 我が国の地方公共団体向け	—	—	—	—
6. 外国の中央政府等以外の公共部門向け	—	—	—	—
7. 国際開発銀行向け	—	—	—	—
8. 地方公共団体金融機構向け	30	1	30	1
9. 我が国の政府関係機関向け	302	12	293	11
10. 地方三公社向け	—	—	—	—
11. 金融機関及び第一種金融商品取引業者向け	5,415	216	5,463	218
12. 法人等向け	230,007	9,200	244,542	9,781
13. 中小企業等向け及び個人向け	125,812	5,032	130,694	5,227
14. 抵当権付住宅ローン	19,251	770	21,615	864
15. 不動産取得等事業向け	1,000	40	1,000	40
16. 三月以上延滞等	293	11	260	10
17. 取立未済手形	—	—	—	—
18. 信用保証協会等による保証付	2,876	115	2,843	113
19. 株式会社地域経済活性化支援機構等による保証付	—	—	—	—
20. 出資等	20,647	825	13,296	531
(うち出資等のエクスポージャー)	20,647	825	13,296	531
(うち重要な出資のエクスポージャー)	—	—	—	—
21. 上記以外	34,980	1,399	34,917	1,396
(うち他の金融機関等の対象資本調達手段のうち対象普通株式等に該当するもの以外のものに係るエクスポージャー)	10,024	400	10,023	400
(うち特定項目のうち調整項目に算入されない部分に係るエクスポージャー)	9,980	399	10,270	410
(うち上記以外のエクスポージャー)	14,975	599	14,623	584
22. 証券化（オリジネーターの場合）	9,959	398	262	10
(うち再証券化)	—	—	—	—
23. 証券化（オリジネーター以外の場合）	—	—	—	—
(うち再証券化)	—	—	—	—
24. 複数の資産を裏付とする資産（所謂ファンド）のうち、個々の資産の把握が困難な資産	—	—	—	—
25. 経過措置によりリスク・アセットの額に算入されるものの額	1,039	41	620	24
26. 他の金融機関等の対象資本調達手段に係るエクスポージャーに係る経過措置によりリスク・アセットの額に算入されなかったものの額	△ 2,004	△ 80	△ 2,004	△ 80
計 (A)	449,613	17,984	453,834	18,153
資産（オフ・バランス）項目				
1. 任意の時期に無条件で取消可能又は自動的に取消可能なコミットメント	—	—	—	—
2. 原契約期間が1年以下のコミットメント	—	—	—	—
3. 短期の貿易関連偶発債務	44	1	43	1
4. 特定の取引に係る偶発債務	526	21	508	20
(うち経過措置を適用する元本補てん信託契約)	—	—	—	—
5. NIF又はRUF	—	—	—	—
6. 原契約期間が1年超のコミットメント	50	2	50	2
7. 内部格付手法におけるコミットメント	—	—	—	—
8. 信用供与に直接的に代替する偶発債務	5,899	235	7,245	289
(うち借入金の保証)	5,899	235	7,245	289
(うち有価証券の保証)	—	—	—	—
(うち手形引受)	—	—	—	—
(うち経過措置を適用しない元本補てん信託契約)	—	—	—	—
(うちクレジット・デリバティブのプロテクション提供)	—	—	—	—
9. 買戻条件付資産売却又は求償権付資産売却等（控除後）	—	—	—	—
買戻条件付資産売却又は求償権付資産売却等（控除前）	—	—	—	—
控除額（△）	—	—	—	—
10. 先物購入、先渡預金、部分払込株式又は部分払込債券	618	24	1,471	58
11. 有価証券の貸付、現金若しくは有価証券による担保の提供又は有価証券の買戻条件付売却若しくは売戻条件付購入	615	24	374	14
12. 派生商品取引及び長期決済期間取引	667	26	1,743	69
カレント・エクスポージャー方式	667	26	1,743	69
派生商品取引	667	26	1,743	69
外為関連取引	666	26	1,743	69
金利関連取引	0	0	—	—
金関連取引	—	—	—	—
株式関連取引	—	—	—	—
貴金属（金を除く）関連取引	—	—	—	—
その他のコモディティ関連取引	—	—	—	—
クレジット・デリバティブ取引（カウンター・パーティー・リスク）	—	—	—	—
一括清算ネットティング契約による与信相当額削減効果（△）	—	—	—	—
長期決済期間取引	—	—	—	—
標準方式	—	—	—	—
期待エクスポージャー方式	—	—	—	—
13. 未決済取引	—	—	—	—
14. 証券化エクスポージャーに係る適格流動性補完及び適格なサービス・キャッシュ・アドバンス	—	—	—	—
15. 上記以外のオフ・バランスの証券化エクスポージャー	—	—	—	—
計 (B)	8,422	336	11,436	457
CVAリスク相当額を8%で除して得た額 (C)	1,000	40	2,614	104
中央清算機関関連エクスポージャー (D)	1	0	2	0
信用リスク合計 (A) + (B) + (C) + (D) (E)	459,037	18,361	467,888	18,715

(注) 所要自己資本の額は、信用リスク・アセットの額に国内基準行で必要とされる自己資本比率4%を乗じた額であります。

(単体) (単位：百万円)

項 目	平成28年度末		平成29年度末	
	リスク・アセットの額	所要自己資本の額	リスク・アセットの額	所要自己資本の額
資産（オン・バランス）項目				
1. 現金	—	—	—	—
2. 我が国の中央政府及び中央銀行向け	—	—	—	—
3. 外国の中央政府及び中央銀行向け	—	—	—	—
4. 国際決済銀行等向け	—	—	—	—
5. 我が国の地方公共団体向け	—	—	—	—
6. 外国の中央政府等以外の公共部門向け	—	—	—	—
7. 国際開発銀行向け	—	—	—	—
8. 地方公共団体金融機構向け	30	1	30	1
9. 我が国の政府関係機関向け	302	12	293	11
10. 地方三公社向け	—	—	—	—
11. 金融機関及び第一種金融商品取引業者向け	5,415	216	5,463	218
12. 法人等向け	230,885	9,235	245,430	9,817
13. 中小企業等向け及び個人向け	125,579	5,023	130,468	5,218
14. 抵当権付住宅ローン	19,251	770	21,615	864
15. 不動産取得等事業向け	1,000	40	1,000	40
16. 三月以上延滞等	293	11	260	10
17. 取立未済手形	—	—	—	—
18. 信用保証協会等による保証付	2,876	115	2,843	113
19. 株式会社地域経済活性化支援機構等による保証付	—	—	—	—
20. 出資等	20,490	819	13,062	522
(うち出資等のエクスポージャー)	20,490	819	13,062	522
(うち重要な出資のエクスポージャー)	—	—	—	—
21. 上記以外	32,167	1,286	32,320	1,292
(うち他の金融機関等の対象資本調達手段のうち対象普通株式等に該当するもの以外のものに係るエクスポージャー)	10,024	400	10,023	400
(うち特定項目のうち調整項目に算入されない部分に係るエクスポージャー)	9,357	374	9,475	379
(うち上記以外のエクスポージャー)	12,785	511	12,821	512
22. 証券化（オリジネーターの場合）	9,959	398	262	10
(うち再証券化)	—	—	—	—
23. 証券化（オリジネーター以外の場合）	—	—	—	—
(うち再証券化)	—	—	—	—
24. 複数の資産を裏付とする資産（所謂ファンド）のうち、個々の資産の把握が困難な資産	—	—	—	—
25. 経過措置によりリスク・アセットの額に算入されるものの額	1,039	41	620	24
26. 他の金融機関等の対象資本調達手段に係るエクスポージャーに係る経過措置によりリスク・アセットの額に算入されなかったものの額	△ 2,004	△ 80	△ 2,004	△ 80
計 (A)	447,287	17,891	451,666	18,066
資産（オフ・バランス）項目				
1. 任意の時期に無条件で取消可能又は自動的に取消可能なコミットメント	—	—	—	—
2. 原契約期間が1年以下のコミットメント	—	—	—	—
3. 短期の貿易関連偶発債務	44	1	43	1
4. 特定の取引に係る偶発債務	526	21	508	20
(うち経過措置を適用する元本補てん信託契約)	—	—	—	—
5. NIF又はRUF	—	—	—	—
6. 原契約期間が1年超のコミットメント	50	2	50	2
7. 内部格付手法におけるコミットメント	—	—	—	—
8. 信用供与に直接的に代替する偶発債務	5,899	235	7,245	289
(うち借入金の保証)	5,899	235	7,245	289
(うち有価証券の保証)	—	—	—	—
(うち手形引受)	—	—	—	—
(うち経過措置を適用しない元本補てん信託契約)	—	—	—	—
(うちクレジット・デリバティブのプロテクション提供)	—	—	—	—
9. 買戻条件付資産売却又は求償権付資産売却等（控除後）	—	—	—	—
買戻条件付資産売却又は求償権付資産売却等（控除前）	—	—	—	—
控除額（△）	—	—	—	—
10. 先物購入、先渡預金、部分払込株式又は部分払込債券	618	24	1,471	58
11. 有価証券の貸付、現金若しくは有価証券による担保の提供又は有価証券の買戻条件付売却若しくは売戻条件付購入	615	24	374	14
12. 派生商品取引及び長期決済期間取引	667	26	1,743	69
カレント・エクスポージャー方式	667	26	1,743	69
派生商品取引	667	26	1,743	69
外為関連取引	666	26	1,743	69
金利関連取引	0	0	—	—
金関連取引	—	—	—	—
株式関連取引	—	—	—	—
貴金属（金を除く）関連取引	—	—	—	—
その他のコモディティ関連取引	—	—	—	—
クレジット・デリバティブ取引（カウンター・パーティー・リスク）	—	—	—	—
一括清算ネットティング契約による与信相当額削減効果（△）	—	—	—	—
長期決済期間取引	—	—	—	—
標準方式	—	—	—	—
期待エクスポージャー方式	—	—	—	—
13. 未決済取引	—	—	—	—
14. 証券化エクスポージャーに係る適格流動性補完及び適格なサービス・キャッシュ・アドバンス	—	—	—	—
15. 上記以外のオフ・バランスの証券化エクスポージャー	—	—	—	—
計 (B)	8,422	336	11,436	457
CVAリスク相当額を8%で除して得た額 (C)	1,000	40	2,614	104
中央清算機関関連エクスポージャー (D)	1	0	2	0
信用リスク合計 (A) + (B) + (C) + (D) (E)	456,711	18,268	465,720	18,628

(注) 所要自己資本の額は、信用リスク・アセットの額に国内基準行で必要とされる自己資本比率4%を乗じた額であります。



自己資本の充実の状況等について

(2)オペレーショナル・リスクに対する所要自己資本の額及び手法ごとの額 (連結)

(単位：百万円)				
	平成28年度末	所要自己資本の額	平成29年度末	所要自己資本の額
オペレーショナル・リスク	オペレーショナル・リスク相当額を8%で除して得た額		オペレーショナル・リスク相当額を8%で除して得た額	
基礎的手法	24,671	986	23,085	923
粗利益配分手法	—	—	—	—
先進的計測手法	—	—	—	—

(注) オペレーショナル・リスクに対する所要自己資本の額は、オペレーショナル・リスク相当額を8%で除して得た額に国内基準行で必要とされる自己資本比率4%を乗じた額であります。

(単体)

(単位：百万円)				
	平成28年度末	所要自己資本の額	平成29年度末	所要自己資本の額
オペレーショナル・リスク	オペレーショナル・リスク相当額を8%で除して得た額		オペレーショナル・リスク相当額を8%で除して得た額	
基礎的手法	24,371	974	22,770	910
粗利益配分手法	—	—	—	—
先進的計測手法	—	—	—	—

(注) オペレーショナル・リスクに対する所要自己資本の額は、オペレーショナル・リスク相当額を8%で除して得た額に国内基準行で必要とされる自己資本比率4%を乗じた額であります。

(3)総所要自己資本額

(連結)

(単位：百万円)		
	平成28年度末	平成29年度末
総所要自己資本額	19,348	19,638

(注) 総所要自己資本額は、信用リスク・アセットの額及びオペレーショナル・リスク相当額を8%で除して得た額に、国内基準行で必要とされる自己資本比率4%を乗じた額であります。

(単体)

(単位：百万円)		
	平成28年度末	平成29年度末
総所要自己資本額	19,243	19,539

(注) 総所要自己資本額は、信用リスク・アセットの額及びオペレーショナル・リスク相当額を8%で除して得た額に、国内基準行で必要とされる自己資本比率4%を乗じた額であります。

3.信用リスクに関する事項

(1)信用リスクに関するエクスポージャーの期末残高及び三月以上延滞エクスポージャーの期末残高（地域別、業種別、残存期間別）

(連結)

(単位：百万円)										
	信用リスクエクスポージャー期末残高								左記に含まれる三月以上延滞エクスポージャー	
			うち貸出金、コミットメント及びその他のデリバティブ以外のオフ・バランス取引		うち債券		うちデリバティブ取引		平成28年度末	平成29年度末
	平成28年度末	平成29年度末	平成28年度末	平成29年度末	平成28年度末	平成29年度末	平成28年度末	平成29年度末		
国内計	1,030,537	1,036,708	755,739	782,982	186,613	159,617	1,201	2,972	507	578
国外計	7,903	6,098	—	—	7,903	3,952	—	—	—	—
地域別合計	1,038,441	1,042,807	755,739	782,982	194,517	163,570	1,201	2,972	507	578
製造業	67,768	68,475	67,018	66,773	392	386	356	1,315	—	—
農業、林業	1,224	1,877	1,224	1,877	—	—	—	—	—	—
漁業	239	212	239	212	—	—	—	—	—	—
鉱業採石業砂利採取業	114	50	114	50	—	—	—	—	—	—
建設業	21,118	21,628	20,739	21,248	379	379	—	—	8	2
電気・ガス・熱供給・水道業	14,480	16,496	12,099	14,115	2,381	2,381	—	—	—	—
情報通信業	2,032	2,124	1,951	2,043	80	80	—	—	—	—
運輸・郵便業	6,757	8,054	6,729	8,026	28	28	—	—	—	—
卸売・小売業	58,352	55,219	58,039	54,922	136	160	176	136	47	46
金融・保険業	167,639	165,865	66,681	68,401	47,561	37,189	533	1,449	—	—
不動産業	38,691	47,876	38,341	47,538	338	338	—	—	20	11
個人による貸家業	63,875	65,409	63,875	65,409	—	—	—	—	49	—
各種サービス業	80,429	92,820	80,390	92,749	34	66	—	—	188	246
国、地方公共団体	284,996	268,908	167,074	164,723	117,921	104,185	—	—	—	—
その他	230,719	227,787	171,220	174,891	25,262	18,372	134	71	194	271
業種別合計	1,038,441	1,042,807	755,739	782,982	194,517	163,570	1,201	2,972	507	578
1年以下	57,839	64,147	41,817	43,094	15,609	18,946	411	2,105		
1年超3年以下	81,176	72,165	51,679	52,370	29,487	19,144	9	651		
3年超5年以下	116,952	100,399	85,526	81,286	30,770	18,967	655	144		
5年超7年以下	66,409	83,458	59,418	67,448	6,990	16,009	—	—		
7年超	491,780	495,826	440,296	454,001	51,454	41,824	29	—		
期間の定めのないもの	224,282	226,810	77,000	84,780	60,203	48,677	95	71		
残存期間別合計	1,038,441	1,042,807	755,739	782,982	194,517	163,570	1,201	2,972		

(注) 1.貸出金は私募債取引を含みます。	平成28年度末	平成29年度末	2.未収収益については業種区分を行っていないため、「貸出金、コミットメント及びその他のデリバティブ以外のオフ・バランス取引」の「その他」を含みます。	平成28年度末	平成29年度末
	9,600	11,330		1,050	1,084

3.複数の資産を裏付とする資産（所謂ファンド）については地域別の区別ができないものは「国内計」に含みます。また、業種区分を行っていないため、「債券」及び「デリバティブ取引」の「その他」に含みます。
4.「三月以上延滞エクスポージャー」とは、元本または利息の支払が約定支払日の翌日から3ヶ月以上延滞しているエクスポージャー、または引当金勘案前でリスク・ウェイトが150%であるエクスポージャーであります。なお、「三月以上延滞エクスポージャー」は、残存期間別区分を行っておりません。

(単体)

(単位：百万円)										
	信用リスクエクスポージャー期末残高								左記に含まれる三月以上延滞エクスポージャー	
			うち貸出金、コミットメント及びその他のデリバティブ以外のオフ・バランス取引		うち債券		うちデリバティブ取引		平成28年度末	平成29年度末
	平成28年度末	平成29年度末	平成28年度末	平成29年度末	平成28年度末	平成29年度末	平成28年度末	平成29年度末		
国内計	1,028,454	1,034,894	756,253	783,523	186,456	159,382	1,201	2,972	457	535
国外計	7,903	6,098	—	—	7,903	3,952	—	—	—	—
地域別合計	1,036,358	1,040,993	756,253	783,523	194,360	163,335	1,201	2,972	457	535
製造業	67,768	68,475	67,018	66,773	392	386	356	1,315	—	—
農業、林業	1,224	1,877	1,224	1,877	—	—	—	—	—	—
漁業	239	212	239	212	—	—	—	—	—	—
鉱業採石業砂利採取業	114	50	114	50	—	—	—	—	—	—
建設業	21,118	21,628	20,739	21,248	379	379	—	—	8	2
電気・ガス・熱供給・水道業	14,480	16,496	12,099	14,115	2,381	2,381	—	—	—	—
情報通信業	2,032	2,124	1,951	2,043	80	80	—	—	—	—
運輸・郵便業	6,757	8,054	6,729	8,026	28	28	—	—	—	—
卸売・小売業	58,352	55,219	58,039	54,922	136	160	176	136	47	46
金融・保険業	168,363	166,520	67,562	69,289	47,404	36,955	533	1,449	—	—
不動産業	38,691	47,876	38,341	47,538	338	338	—	—	20	11
個人による貸家業	63,875	65,409	63,875	65,409	—	—	—	—	49	—
各種サービス業	80,429	92,819	80,390	92,749	34	65	—	—	188	246
国、地方公共団体	284,996	268,908	167,074	164,723	117,921	104,185	—	—	—	—
その他	227,912	225,319	170,852	174,544	25,262	18,372	134	71	143	228
業種別合計	1,036,358	1,040,993	756,253	783,523	194,360	163,335	1,201	2,972	457	535
1年以下	57,802	64,228	41,780	43,175	15,609	18,946	411	2,105		
1年超3年以下	81,387	72,380	51,890	52,585	29,487	19,144	9	651		
3年超5年以下	117,292	100,644	85,866	81,531	30,770	18,967	655	144		
5年超7年以下	66,409	83,458	59,418	67,448	6,990	16,009	—	—		
7年超	491,780	495,826	440,296	454,001	51,454	41,824	29	—		
期間の定めのないもの	221,685	224,455	77,000	84,780	60,046	48,442	95	71		
残存期間別合計	1,036,358	1,040,993	756,253	783,523	194,360	163,335	1,201	2,972		

(注) 1.貸出金は私募債取引を含みます。	平成28年度末	平成29年度末	2.未収収益については業種区分を行っていないため、「貸出金、コミットメント及びその他のデリバティブ以外のオフ・バランス取引」の「その他」を含みます。	平成28年度末	平成29年度末
	9,600	11,330		1,029	1,064

3.複数の資産を裏付とする資産（所謂ファンド）については地域別の区別ができないものは「国内計」に含みます。また、業種区分を行っていないため、「債券」及び「デリバティブ取引」の「その他」に含みます。
4.「三月以上延滞エクスポージャー」とは、元本または利息の支払が約定支払日の翌日から3ヶ月以上延滞しているエクスポージャー、または引当金勘案前でリスク・ウェイトが150%であるエクスポージャーであります。なお、「三月以上延滞エクスポージャー」は、残存期間別区分を行っておりません。



自己資本の充実の状況等について

(2)一般貸倒引当金、個別貸倒引当金、特定海外債権引当勘定の期末残高及び期中増減額

(一般貸倒引当金、個別貸倒引当金、特定海外債権引当勘定の期末残高及び期中増減額)

(連結)		(単位：百万円)			(単体)		(単位：百万円)		
		期首残高	当期増減額	期末残高			期首残高	当期増減額	期末残高
一般貸倒引当金	平成28年度	861	△ 185	675	一般貸倒引当金	平成28年度	840	△ 188	652
	平成29年度	675	202	878		平成29年度	652	205	857
個別貸倒引当金	平成28年度	2,150	108	2,259	個別貸倒引当金	平成28年度	2,083	122	2,205
	平成29年度	2,259	543	2,803		平成29年度	2,205	549	2,755
特定海外債権引当勘定	平成28年度				特定海外債権引当勘定	平成28年度			
	平成29年度					平成29年度			
合 計	平成28年度	3,012	△ 77	2,935	合 計	平成28年度	2,924	△ 66	2,858
	平成29年度	2,935	746	3,681		平成29年度	2,858	755	3,613

(一般貸倒引当金の地域別、業種別内訳)

当行及び連結グループでは、一般貸倒引当金について地域別、業種別の区分ごとの算定を行っておりません。

(個別貸倒引当金の地域別、業種別内訳)

(連結)		(単位：百万円)							
		期首残高		当期増加額		当期減少額		期末残高	
		平成28年度	平成29年度	平成28年度	平成29年度	平成28年度	平成29年度	平成28年度	平成29年度
国 内 計		2,150	2,259	504	649	395	105	2,259	2,803
国 外 計		－	－	－	－	－	－	－	－
地 域 別 合 計		2,150	2,259	504	649	395	105	2,259	2,803
製 造 業		340	276	－	－	64	69	276	206
農 業 ， 林 業		－	0	0	0	－	－	0	0
漁 業		－	－	－	－	－	－	－	－
鉱 業，採 石 業，砂 利 採 取 業		－	－	－	－	－	－	－	－
建 設 業		73	5	－	－	67	3	5	1
電気・ガス・熱供給・水道業		－	－	－	－	－	－	－	－
情 報 通 信 業		－	－	－	－	－	－	－	－
運 輸 ・ 郵 便 業		0	0	－	－	0	0	0	0
卸 売 ・ 小 売 業		636	581	－	487	54	－	581	1,068
金 融 ・ 保 険 業		－	－	－	－	－	－	－	－
不 動 産 業		85	589	504	－	－	11	589	578
個 人 に よ る 貸 家 業		32	29	－	－	3	20	29	8
各 種 サ ー ビ ス 業		729	529	－	51	200	－	529	580
国，地 方 公 共 団 体		－	－	－	－	－	－	－	－
そ の 他		252	247	－	110	5	－	247	358
業 種 別 計		2,150	2,259	504	649	395	105	2,259	2,803

(単体)		(単位：百万円)							
		期首残高		当期増加額		当期減少額		期末残高	
		平成28年度	平成29年度	平成28年度	平成29年度	平成28年度	平成29年度	平成28年度	平成29年度
国 内 計		2,083	2,205	512	655	390	105	2,205	2,755
国 外 計		－	－	－	－	－	－	－	－
地 域 別 合 計		2,083	2,205	512	655	390	105	2,205	2,755
製 造 業		340	276	－	－	64	69	276	206
農 業 ， 林 業		－	0	0	0	－	－	0	0
漁 業		－	－	－	－	－	－	－	－
鉱 業，採 石 業，砂 利 採 取 業		－	－	－	－	－	－	－	－
建 設 業		73	5	－	－	67	3	5	1
電気・ガス・熱供給・水道業		－	－	－	－	－	－	－	－
情 報 通 信 業		－	－	－	－	－	－	－	－
運 輸 ・ 郵 便 業		0	0	－	－	0	0	0	0
卸 売 ・ 小 売 業		636	581	－	487	54	－	581	1,068
金 融 ・ 保 険 業		－	－	－	－	－	－	－	－
不 動 産 業		85	589	504	－	－	11	589	578
個 人 に よ る 貸 家 業		32	29	－	－	3	20	29	8
各 種 サ ー ビ ス 業		729	529	－	51	200	－	529	580
国，地 方 公 共 団 体		－	－	－	－	－	－	－	－
そ の 他		185	193	8	116	－	－	193	310
業 種 別 計		2,083	2,205	512	655	390	105	2,205	2,755

(3)業種別又は取引相手別の貸出金償却の額

(連結) (単位：百万円)

	貸出金償却	
	平成28年度末	平成29年度末
製 造 業	4	6
農 業 ， 林 業	－	－
漁 業	－	－
鉱 業，採 石 業，砂 利 採 取 業	－	－
建 設 業	0	0
電気・ガス・熱供給・水道業	－	－
情 報 通 信 業	－	－
運 輸 ・ 郵 便 業	0	－
卸 売 ・ 小 売 業	58	0
金 融 ・ 保 険 業	－	－
不 動 産 業	81	－
個 人 に よ る 貸 家 業	－	－
各 種 サ ー ビ ス 業	154	0
国，地 方 公 共 団 体	－	－
そ の 他	30	44
業 種 別 合 計	329	50

(単体) (単位：百万円)

	貸出金償却	
	平成28年度末	平成29年度末
製 造 業	4	5
農 業 ， 林 業	－	－
漁 業	－	－
鉱 業，採 石 業，砂 利 採 取 業	－	－
建 設 業	－	－
電気・ガス・熱供給・水道業	－	－
情 報 通 信 業	－	－
運 輸 ・ 郵 便 業	－	－
卸 売 ・ 小 売 業	57	－
金 融 ・ 保 険 業	－	－
不 動 産 業	81	－
個 人 に よ る 貸 家 業	－	－
各 種 サ ー ビ ス 業	154	－
国，地 方 公 共 団 体	－	－
そ の 他	6	25
業 種 別 合 計	304	31

(4)標準的手法が適用されるエクスポージャーについて、リスク・ウェイトの区分ごとの信用リスク削減手法の効果を勘案した後の残高

(連結) (単位：百万円)

	エクスポージャーの額			
	平成28年度末		平成29年度末	
	格付有り	格付無し	格付有り	格付無し
0%	406,711	23,196	387,239	22,138
10%	3,832	28,932	4,109	28,558
20%	33,592	－	33,413	－
35%	－	55,076	－	61,839
40%	－	－	－	－
50%	45,872	284	47,773	386
75%	－	164,749	－	171,783
100%	17,941	250,146	16,122	261,238
150%	－	103	－	86
200%	－	4,009	－	4,009
225%	－	－	－	－
250%	－	3,992	－	4,108
350%	－	－	－	－
650%	－	－	－	－
1250%	－	－	－	－
合 計	507,950	530,490	488,658	554,149

(注) 1.格付は適格格付機関が付与しているものに限ります。
2.中央政府及び中央銀行、地方公共団体、政府関係機関、金融機関については所在する国の格付のリスク・ウェイトにより区分しているほか、信用リスク・アセットの額を算出する際に、保証効果を勘案している取引については、その保証人等に付与されている格付のリスク・ウェイトにより区分しております。

(単体) (単位：百万円)

	エクスポージャーの額			
	平成28年度末		平成29年度末	
	格付有り	格付無し	格付有り	格付無し
0%	406,711	23,196	387,239	22,138
10%	3,832	28,932	4,109	28,558
20%	33,592	－	33,413	－
35%	－	55,076	－	61,839
40%	－	－	－	－
50%	45,872	233	47,773	343
75%	－	164,434	－	171,478
100%	17,941	248,677	16,122	260,089
150%	－	103	－	86
200%	－	4,009	－	4,009
225%	－	－	－	－
250%	－	3,743	－	3,790
350%	－	－	－	－
650%	－	－	－	－
1250%	－	－	－	－
合 計	507,950	528,407	488,658	552,335

(注) 1.格付は適格格付機関が付与しているものに限ります。
2.中央政府及び中央銀行、地方公共団体、政府関係機関、金融機関については所在する国の格付のリスク・ウェイトにより区分しているほか、信用リスク・アセットの額を算出する際に、保証効果を勘案している取引については、その保証人等に付与されている格付のリスク・ウェイトにより区分しております。

4.信用リスク削減手法に関する事項

(単位：百万円)

区分	信用リスク削減手法が適用されたエクスポージャー	
	平成28年度末	平成29年度末
現金及び自行預金	11,898	12,637
金	－	－
適格債券	－	－
適格株式	2,295	2,246
適格投資信託	－	－
適格金融資産担保合計	14,194	14,883
適格保証	19,068	19,022
適格クレジット・デリバティブ	－	－
適格保証、適格クレジット・デリバティブ合計	19,068	19,022

(注) 本項目につきましては、連結グループと単体が同じ計数です。



自己資本の充実の状況等について

5.派生商品取引及び長期決済期間取引の取引相手のリスクに関する事項

(1)与信相当額の算出に用いる方式

(平成28年度末)
当行の連結グループ及び単体では、先渡、スワップ、オプションその他の派生商品取引の与信相当額をカレント・エクスポージャー方式にて算出しております。当行の連結グループ及び単体では、長期決済期間取引に該当する取引はありません。
(平成29年度末)
当行の連結グループ及び単体では、先渡、スワップ、オプションその他の派生商品取引の与信相当額をカレント・エクスポージャー方式にて算出しております。当行の連結グループ及び単体では、長期決済期間取引に該当する取引はありません。

(2)グロス再構築コストの額の合計額

(単位：百万円)

	平成28年度末	平成29年度末
グロス再構築コスト	84	126

(注) 1.複数の資産を裏付とする資産（所謂ファンド）については、記載を省略しております。
2.本項目につきましては、連結グループと単体が同じ計数です。

(3)担保による信用リスク削減手法の効果を勘案する前の与信相当額

派生商品取引を時価評価することにより算出した再構築コストの額（ただし零を下回らないもの）及びグロスのアドオンにより算出した、担保による信用リスク削減手法の効果を勘案する前の与信相当額は次のとおりであります（当行では、法的に有効な相対ネットティング契約下にある取引はないため、再構築コスト及びアドオンはネットしておりません）。

(単位：百万円)

種類及び取引の区分	与信相当額	
	平成28年度末	平成29年度末
派生商品取引	1,201	2,972
外国為替関連取引及び金関連取引	1,200	2,972
金利関連取引	0	－
株式関連取引	－	－
貴金属（金を除く）関連取引	－	－
その他のコモディティ関連取引	－	－
クレジット・デリバティブ取引（カウンターパーティー・リスク）	－	－
合計	1,201	2,972

(注) 1.原契約期間が5営業日以内の外国為替関連取引の与信相当額は上記記載から除いております。
2.本項目につきましては、連結グループと単体が同じ計数です。

(4)グロス再構築コストの額の合計額及びグロスのアドオンの合計額から担保による信用リスク削減手法の効果を勘案する前の与信相当額を差し引いた額

(平成28年度末)
当行の連結グループ及び単体における、グロス再構築コストの額の合計額及びグロスのアドオンの合計額と担保による信用リスク削減手法の効果を勘案する前の与信相当額は同額であり、差額は0円です。
(平成29年度末)
当行の連結グループ及び単体における、グロス再構築コストの額の合計額及びグロスのアドオンの合計額と担保による信用リスク削減手法の効果を勘案する前の与信相当額は同額であり、差額は0円です。

(5)担保の種類別の額

(平成28年度末)
当行の連結グループ及び単体では、派生商品取引に係る保全や引当の算定は行っておりません。
(平成29年度末)
当行の連結グループ及び単体では、派生商品取引に係る保全や引当の算定は行っておりません。

(6)担保による信用リスク削減手法の効果を勘案した後の与信相当額

(単位：百万円)

種類及び取引の区分	与信相当額	
	平成28年度末	平成29年度末
派生商品取引	1,201	2,972
外国為替関連取引及び金関連取引	1,200	2,972
金利関連取引	0	－
株式関連取引	－	－
貴金属（金を除く）関連取引	－	－
その他のコモディティ関連取引	－	－
クレジット・デリバティブ取引（カウンターパーティー・リスク）	－	－
合計	1,201	2,972

(注) 1.原契約期間が5営業日以内の外国為替関連取引の与信相当額は上記記載から除いております。
2.本項目につきましては、連結グループと単体が同じ計数です。

(7)与信相当額算出の対象となるクレジット・デリバティブの想定元本額をクレジット・デリバティブの種類別、かつ、プロテクションの購入又は提供の別に区分した額

(平成28年度末)
当行の連結グループ及び単体では、クレジット・デリバティブを保有していないことから、該当ありません。
(平成29年度末)
当行の連結グループ及び単体では、クレジット・デリバティブを保有していないことから、該当ありません。

(8)信用リスク削減手法の効果を勘案するために用いているクレジット・デリバティブの想定元本額

(平成28年度末)
当行の連結グループ及び単体では、クレジット・デリバティブを保有していないことから、該当ありません。
(平成29年度末)
当行の連結グループ及び単体では、クレジット・デリバティブを保有していないことから、該当ありません。

6.証券化エクスポージャーに関する事項

(1)銀行または連結グループがオリジネーターである証券化エクスポージャーに関する事項

(原資産の合計額、資産譲渡型証券化取引に係る原資産及び合成型証券化取引に係る原資産の額並びにこれらの主な原資産の種類別の内訳（ただし、銀行または連結グループが証券化エクスポージャーを保有しない証券化取引の原資産については、当期の証券化取引に係るものに限る））
(原資産を構成するエクスポージャーのうち、三月以上延滞エクスポージャーの額またはデフォルトしたエクスポージャーの額及び当期の損失額並びにこれらの主な原資産の種類別の内訳（ただし、銀行または連結グループが証券化エクスポージャーを保有しない証券化取引の原資産については、当期の証券化取引に係るものに限る））
(証券化取引を目的として保有している資産の額及びこれらの主な資産の種類別の内訳)
(当期に証券化を行ったエクスポージャーの概略)
(証券化取引に伴い当期中に認識した売却損益の額及び主な原資産の種類別の内訳)
(保有する証券化エクスポージャーの額及び主な原資産の種類別の内訳)
(証券化取引に伴い増加した自己資本に相当する額及び原資産の種類別の内訳)
(自己資本比率告示第二百四十七条第一項の規定により千二百五十パーセントのリスク・ウェイトが適用される証券化エクスポージャーの額及び原資産の種類別の内訳)
(早期償還条項付の証券化エクスポージャーに関する事項)

○資産譲渡型証券化取引に係る項目

(平成28年度末)

(単位：百万円)

	合計	原資産の種類
		住宅ローン債権
資産譲渡型証券化取引に係る原資産の額	6,927	6,927
うち三月以上延滞エクスポージャーの額	－	－
当期損失額	－	－
証券化取引を目的として保有している資産の額	－	－
当期に証券化を行ったエクスポージャーの額	－	－
証券化取引に伴い当期中に認識した売却損益の額	－	－
保有する証券化エクスポージャーの額(※)	9,308	9,308
証券化取引に伴い増加した自己資本相当額	83	83
告示第二百四十七条第一項の規定により千二百五十パーセントのリスク・ウェイトが適用される証券化エクスポージャーの額	638	638
早期償還条項付の証券化エクスポージャーの額	－	－

(注) 1.本項目につきましては、連結グループと単体が同じ計数です。
2.当行の連結グループ及び単体では、再証券化エクスポージャーを保有していません。
※住宅ローン債権における劣後受益権（留保持分）の額を記載しております。

(平成29年度末)
当行の連結グループ及び単体では、資産譲渡型証券化取引の該当はありません。

○合成型証券化取引に係る項目

(平成28年度末)
当行の連結グループ及び単体では、合成型証券化取引の該当はありません。

(平成29年度末)

(単位：百万円)

	合計	原資産の種類
		事業者向け貸出債権
合成型証券化取引に係る原資産の額	719	719
うち三月以上延滞エクスポージャーの額	－	－
当期損失額	－	－
証券化取引を目的として保有している資産の額	－	－
当期に証券化を行ったエクスポージャーの額	719	719
証券化取引に伴い当期中に認識した売却損益の額	－	－
保有する証券化エクスポージャーの額	21	21
証券化取引に伴い増加した自己資本相当額	－	－
告示第二百四十七条第一項の規定により千二百五十パーセントのリスク・ウェイトが適用される証券化エクスポージャーの額	21	21
早期償還条項付の証券化エクスポージャーの額	－	－

(注) 1.本項目につきましては、連結グループと単体が同じ計数です。
2.当行の連結グループ及び単体では、再証券化エクスポージャーを保有していません。

(保有する再証券化エクスポージャーに対する信用リスク削減手法の適用の有無及び保証人ごと又は当該保証人に適用されるリスク・ウェイトの区分ごとの内訳)
(平成28年度末)
当行の連結グループ及び単体では、再証券化エクスポージャーを保有していません。
(平成29年度末)
当行の連結グループ及び単体では、再証券化エクスポージャーを保有していません。

(保有する証券化エクスポージャーの適切な数のリスク・ウェイトの区分ごとの残高及び所要自己資本の額)

(単位：百万円)

	残高	所要自己資本
20%	8,100	64
40%	－	－
50%	430	8
100%	140	5
225%	－	－
350%	－	－
650%	－	－
1250%	638	319
合 計	9,308	398

(注) 所要自己資本の額は、信用リスク・アセットの額に国内基準行で必要とされる自己資本比率4%を乗じた額であります。

(保有する証券化エクスポージャーの適切な数のリスク・ウェイトの区分ごとの残高及び所要自己資本の額)

(単位：百万円)

	残高	所要自己資本
20%	－	－
40%	－	－
50%	－	－
100%	－	－
225%	－	－
350%	－	－
650%	－	－
1250%	21	10
合 計	21	10

(注) 所要自己資本の額は、信用リスク・アセットの額に国内基準行で必要とされる自己資本比率4%を乗じた額であります。



自己資本の充実の状況等について

(2) 銀行または連結グループが投資家である証券化エクスポージャーに関する事項 (保有する証券化エクスポージャーの額及び主な原資産の種類別の内訳)

(平成28年度末)

連結グループ・単体とも該当ありません。

(平成29年度末)

連結グループ・単体とも該当ありません。

(保有する証券化エクスポージャーの適切な数のリスク・ウェイトの区分ごとの残高及び所要自己資本の額)

(平成28年度末)

連結グループ・単体とも該当ありません。

(平成29年度末)

連結グループ・単体とも該当ありません。

(自己資本比率告示第二百四十七条第一項の規定により千二百五十パーセントのリスク・ウェイトが適用される証券化エクスポージャーの額及び原資産の種類別の内訳)

(平成28年度末)

連結グループ・単体とも該当ありません。

(平成29年度末)

連結グループ・単体とも該当ありません。

(保有する再証券化エクスポージャーに対する信用リスク削減手法の適用の有無及び保証人ごと又は当該保証人に適用されるリスク・ウェイトの区分ごとの内訳)

(平成28年度末)

当行の連結グループ及び単体では、再証券化エクスポージャーを保有していません。

(平成29年度末)

当行の連結グループ及び単体では、再証券化エクスポージャーを保有していません。

(銀行がオリジネーターである場合におけるマーケット・リスク相当額の算出対象となる証券化エクスポージャーに関する事項)

(平成28年度末)

連結グループ・単体とも該当ありません。

(平成29年度末)

連結グループ・単体とも該当ありません。

(銀行が投資家である場合におけるマーケット・リスク相当額の算出対象となる証券化エクスポージャーに関する事項)

(平成28年度末)

連結グループ・単体とも該当ありません。

(平成29年度末)

連結グループ・単体とも該当ありません。

7. 出資等または株式等エクスポージャーに関する事項

(1) (連結) 貸借対照表計上額、時価及び次に掲げる事項に係る (連結) 貸借対照表計上額

(上場している出資等又は株式等エクスポージャー及びそれ以外の出資等又は株式等エクスポージャー)

(単位：百万円)

	平成28年度末		平成29年度末	
	(連結) 貸借対照表計上額	時価	(連結) 貸借対照表計上額	時価
上場している出資等又は株式等エクスポージャーの (連結) 貸借対照表計上額	13,719		11,935	
上記に該当しない出資等又は株式等エクスポージャーの (連結) 貸借対照表計上額	1,556		1,633	
合 計	15,275	15,275	13,568	13,568

(注) 1. 上場投資信託の一部については株式等エクスポージャーに含めております。
2. 複数の資産を裏付とする資産 (所謂 ファンド) については、記載を省略しております。
3. 連結グループは当行のみのため、本項目につきましては連結グループと単体が同じ計数です。

(子会社・関連会社株式の貸借対照表計上額等)

(単位：百万円)

	貸借対照表計上額	
	平成28年度末	平成29年度末
子会社・子法人等	78	78
関連法人等	4	4
合 計	82	82

(2) 出資等又は株式等エクスポージャーの売却及び償却に伴う損益の額

(単位：百万円)

	(連結) 貸借対照表計上額	
	平成28年度	平成29年度
売却損益額	907	555
償却額	4	8

(注) 連結グループは当行のみのため、本項目につきましては連結グループと単体が同じ計数です。

(3) (連結) 貸借対照表で認識され、かつ、(連結) 損益計算書で認識されない評価損益の額

(単位：百万円)

	平成28年度	平成29年度
評価損益額	874	1,143

(注) 連結グループは当行のみのため、本項目につきましては連結グループと単体が同じ計数です。

(4) (連結) 貸借対照表及び (連結) 損益計算書で認識されない評価損益の額

(平成28年度末)

連結グループ・単体とも該当ありません。

(平成29年度末)

連結グループ・単体とも該当ありません。

8. 金利リスクに関して銀行が内部管理上使用した金利ショックに対する損益又は経済価値の増減額

(単位：百万円)

区分	平成28年度末			平成29年度末		
	金利リスク量			金利リスク量		
		預貸その他	有価証券		預貸その他	有価証券
運用	△ 4,821	△ 3,753	△ 1,068	△ 6,608	△ 5,495	△ 1,113
調達	1,333	1,333	-	1,614	1,614	-
金融派生	1	1	-	-	-	-
総金利リスク量	△ 3,487			△ 4,994		

(注) 1. 連結グループは当行のみのため、本項目につきましては連結グループと単体が同じ計数です。
2. 保有期間6ヶ月、観測期間5年で計測した99パーセンタイル値

(アウトライヤー基準に基づく標準的金利ショックによって計算される経済価値の増減額)

(単位：百万円)

区分	平成28年度末			平成29年度末		
	金利リスク量			金利リスク量		
		預貸その他	有価証券		預貸その他	有価証券
運用	△ 6,818	△ 5,308	△ 1,510	△ 9,345	△ 7,771	△ 1,574
調達	1,885	1,885	-	2,282	2,282	-
金融派生	1	1	-	-	-	-
総金利リスク量	△ 4,932			△ 7,063		

(注) 保有期間1年、観測期間5年で計測した99パーセンタイル値

	平成28年度末	平成29年度末
アウトライヤー比率	10.69%	15.37%



報酬等に関する開示事項

1. 当行（グループ）の対象役職員の報酬等に関する組織体制の整備状況に関する事項

(1) 「対象役職員」の範囲

開示の対象となる報酬告示に規定されている「対象役員」および「対象従業員等」（合わせて「対象役職員」）の範囲については、以下のとおりであります。

① 「対象役員」の範囲

対象役員は、当行の取締役および監査役であります。なお、社外取締役および社外監査役を除いております。

② 「対象従業員等」の範囲

当行では、対象役員以外の当行の役員および従業員ならびに主要な連結子法人等の役職員のうち、「高額の報酬等を受ける者」で当行およびその主要な連結子法人等の業務の運営または財産の状況に重要な影響を与える者等を「対象従業員等」として、開示の対象としております。

なお、当行の対象役員以外の役員および従業員ならびに主要な連結子法人等の役職員で、対象従業員等に該当する者はありません。

(ア) 「主要な連結子法人等」の範囲

「主要な連結子法人等」とは、当行の連結総資産に対する当該子法人等の割合が2%を超えるものおよびグループ経営に重要な影響を与える連結子法人等ではありますが、該当する連結子法人等はありません。

(イ) 「高額の報酬等を受ける者」の範囲

「高額の報酬等を受ける者」とは、当行の有価証券報告書記載の「役員区分ごとの報酬の総額」を同記載の「対象となる役員の員数」により除すことで算出される「対象役職員の平均報酬額」以上の報酬等を受ける者を指します。

(ウ) 「グループの業務の運営または財産の状況に重要な影響を与えるもの」の範囲

「グループの業務の運営または財産の状況に重要な影響を与えるもの」とは、その者が通常行う取引や管理する事項が、当行、当行グループ、主要な連結子法人等の業務の運営に相当程度の影響を与え、または取引等に損失が発生することにより財産の状況に重要な影響を与える者であります。

(2) 対象役職員の報酬等の決定について

当行では、取締役の報酬の総額は、株主総会の決議をもって定めております。その配分については、株主利益との連動性確保と持続的な企業価値の向上を図るため、任期中の成果や貢献度を重視し、取締役会において決定しております。また、監査役の報酬の個人別の配分については、監査役の協議に一任されております。

2. 当行（グループ）の対象役職員の報酬等の体系の設計および運用の適切性の評価に関する事項

(「対象役員」の報酬等に関する方針)

当行は、株主利益との連動性確保と持続的な企業価値の向上を図ることを目的に、取締役に対し当期純利益を基準とした業績連動型報酬を導入しております。取締役の報酬の総額は、株主総会の決議をもって定めております。その配分については、任期中の成果や貢献度を重視し、取締役会において決定しております。

具体的な役員報酬制度といたしましては、役員の報酬等の構成を、

- ・基本額
- ・業績加算額

としております。

また、監査役の報酬の個人別の配分については、監査役の協議に一任されております。

3. 当行（グループ）の対象役職員の報酬等の体系とリスク管理の整合性ならびに報酬等と業績の連動に関する事項

対象役職員の報酬等の決定に当たっては、株主総会で役員全体の報酬総額が決議され、決定される仕組みになっております。

4. 当行（グループ）の対象役職員の報酬等の種類、支払総額および支払方法に関する事項

対象役職員の報酬等の総額

(自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)

区分	人数 (人)	報酬等の 総額 (百万円)	固定報酬		変動報酬		退職慰労 金
			の総額	基本額	の総額	基本額	
対象役員 (除く社外役員)	7	143	143	143	—	—	—
対象従業員等	—	—	—	—	—	—	—

(注) 対象役職員の株式報酬型ストックオプション、賞与については該当ありません。

5. 当行（グループ）の対象役職員の報酬等の体系に関し、その他参考となるべき事項

特段、前項までに掲げたもののほか、該当する事項はございません。